

New type Oracle

ニュータイプ オラクル

許 平和

KYO HIRAKAZU

インタビュー 多木祥次



ニュータイプ オラクル

許 平和

多木祥次

THEY HAD THE IDEA OF FORMING A SOCIETY FOR BRIGHT PEOPLE, THE ONLY QUALIFICATION FOR MEMBERSHIP OF WHICH WAS A HIGH INTELLIGENCE. THE ORIGINAL AIMS WERE, AS THEY ARE TODAY, TO CREATE A SOCIETY THAT IS NON-POLITICAL AND FREE FROM ALL RACIAL OR RELIGIOUS DISTINCTIONS. THE SOCIETY WELCOMES PEOPLE FROM EVERY WALK OF LIFE WHOSE HIGH INTELLIGENCE

mi
i
s
u
k
u
s
h
i

落標

ニュータイプ オラクル

許 平和

KYO HIRAKAZU

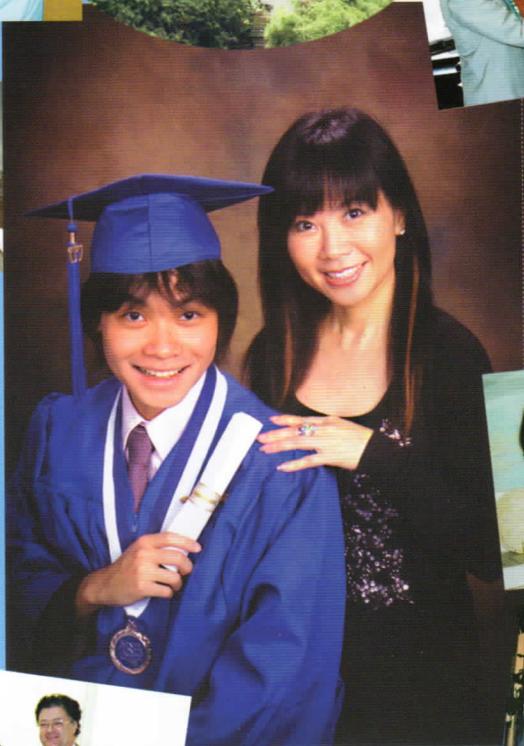
インタビュー 多木祥次





01
N
E







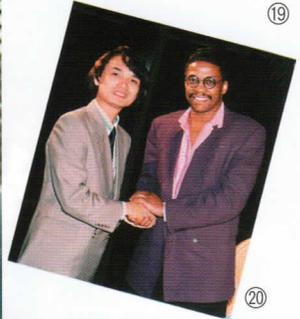
18



19

N
E

21



20



22

P



23



24



25



26

03

27





28



29



30



32



33



34



35

N
E

D

E
04

はじめに

この本は、許平和きょうひらかずの少し大きなサイズの名刺。肩書きではなく、〈中身〉を差し出す一枚の名刺です。

とはいえ、この〈中身〉は本人が書いたものではありません。でも他人だから書けることもあります。彼の価値観、彼のロジック、彼の人間性。私は、自分が彼と接して、大きな魅力を感じ、共感できたその内容を、書きたいと思います。

彼は、いくつもの専門分野で、プロフェッショナルとして認められ、世界的なスケールのなかで活躍の場を持っています。大きく分けると音楽をはじめとする芸術の分野と、事業とマネージメントに関わる経済の分野です。

でも知らない人もいます。彼が日本人ではなく中国・華僑に出自をもつ人だからでもあるでしょうが、もともと日本では、一流のアーチストや、最前線で活動する経済人と、一般大衆がメディアを通してダイレクトに交流する、という場面无に等しいからでもあります。

いずれにせよ、私たちは、許平和を知らない人に、許平和のことを知ってもらうために、この本をつくりました。知ってもらおう、という以外に目的はありません。

いま許さんは、インターネットテレビKYOというメディア運営に力を注いでいますが、活動は依然として多方面にわたり、場所と時間の制約を超えて広がる一方。とにかく忙しい人です。

しかし現在も、世界中の経済人が、音楽家が、政治家が、フィクサーが、建築家が、外交官が、エンジニアが、学者が、アスリートが、旅行家が、ジャーナリストが、未知らぬ人が、許平和に会いに大阪へ来ます。経済危機への不安が広がってからは、日本の銀行や企業のトップからの相談が一段と増えたそうです。

海外の滞在先のホテルのロビーへも、いろいろな分野の人間が話を聞きに来る。アドバイスを求め、チャンスをつかみ、ピンチを逃れて感謝する。一緒に楽しむに来る。一緒にちゃんと遊んで帰る。

会った人の多くが彼とまた近々「再見」することを願い、彼と知り合いであることが幸運だったと思う。人の世の生き方に深く熟達し、一つの分野で大きな成

功を果たし、いつもは人を教えたり導いたりしている人が、彼との関係が驚くほど瑞々しく、とても損得には還元できないものだということを知っている。

それは、歳にも、地位にも、国籍にも、才能にも、関係のない現象でした。

ずっと、いまも、彼が若いということ。世界に名をとどろかす華僑の名家の長であるということ。生まれながらの国際人であり、芸術と実業の両方の世界で才能を開花させてきたということ——これらの事実が、現在の生身の彼が発揮する人間的魅力によって生かされていて、今日も人をひきつけてやまない理由になっているのだと思います。

私は、彼が世界の第一線で活躍してきたどのステージとも縁がないし、これからもないような気がするけれど、最初に会ったときにすぐ、とても懐かしい人に出会った感じがしました。それは何故だろうと、不思議に思ったものです。

自分の方がかなり年上なのに、いきなり「生徒」の顔になってしまった。そういう気分でした。

面白くて正しくて生まれつき豊かな人。これが最初から変わらない彼の印象です。

世界と人間を熟知した老人でも、「何か面白いことないか」と感じ続けている若者でも、同じようにそう感じることでしよう。

華僑だからではなく新しい華僑だから、貴族だからではなく新しい貴族だから、ではないだろうかと思いました。

面白くてもすべらない。正しくても説教しない。豊かでも謙遜しない（嘘をつかない）。そんなことを彼からじかに感じ取ることが、すごく新鮮だし、嬉しくもあるし、元気になる。失礼な言い方ですが、会うだけでこれだけの「効果」がある。

本当は、これだけで十分だし、彼自身もこれで（いま会おう人にどんな印象を与えるかということだけで）本当に十分だと考えている。しかし、許平和という人が、どんな人間であるかを、世界の有名人たちにはなく、いま現在、彼のネットテレビを観ている人、これから彼の番組を楽しむ人に、もっと幅広く、やさしく、正しく、知らせることが必要になった。そういう時機が、自然に生まれ満ちてきたのだと思います。

ここの時点から、何度も続く、ロングサイズのインタビュウが始まりました。

(めったにない愉快的な仕事がやってきたぜ！)

(これが偽らざる私の内心の叫びでした)

新しく出会う人たちと、お互いの現在のプロフィールを交換すること。そしてただちに対等なコミュニケーションが始まること。このことは、人間は与えられた役割の違い(例えば専門家と素人、情報や芸術の送り手と受け取り手)を通して対等に向き合うという、彼の一番基本的な思想にとっては、自然なことだったといえます。

そして、このような自己紹介の必要性は、彼が始めた、いま夢中になっている、「ネットテレビKYO」から生まれてきたものでもあります。

だからご本人も、照れくさいでしょうが、少しガマンしてもらいましょう。

自分を平たく、わかりやすく、正確に紹介する本が必要だということは、彼もよく承知している。でも、そんなことは忙しいから自分ではできないし、出来なのが彼にとって当たり前だし、でもやはり必要だから、つくることになりました

た。

ネットテレビの経営者という入り口から許平和の世界へ入った私ですが、あつという間もなくその全体像の奥行きに圧倒され、小さなマンションの部屋から世界の全景を見ているようなスケールを感じました。どこかの団体のPR誌ではないから、美辞麗句や、個人への大げさな賛辞は控えたいですが、自分が感じた魅力や刺激は、そのままちゃんと素直に書きたいと思います。

彼の生い立ちや、バックボーンや、表現者としての才能について、まったく知らなくても、彼が作る番組を通して、共感し、あこがれ、好きになり、何か相談したくなる人がたくさんいる。この事実が、彼自身にとってすごく大事なことで、十分な価値の証明になっています。

そこでの理解の仕方や、理解のされ方は、彼が世界的な舞台で得ている評価や、ネットワークの豊かさに少しも劣らない。

——私たちは、そういう基本の価値観や、人生観も含めて、許平和のことを知っていたただくために、この大きな名刺みたいな本をつくったのです。

ニュータイプオラクル
許平和 ● 目次

はじめに

1

インターネットテレビで世界と向き合う

11

長い道のりもひとつ飛び

—階段をコツコツ上るのがいいとは限らない

25

世界人というフィールド

—国や文化の違いはきつと超えられる

39

ありのままニッポン

—古くさい理念より瑞々しい直感力

55

家族の生き方

―愛情は相手のために表現するもの

67

身近な問題から世界を見る

77

副社長インタビュー

―どんなステージも面白ければ怖くない

93

サンクチュアリ・インターナショナル

101

●口絵キャプション●

- ① KYO MAYUMI、KYO RUI、KYO HIRAKAZU
- ② イタリア コロッセオ
- ③ KYO RUI
- ④ KYO HIRAKAZU
- ⑤ フランス パリ エッフェル塔
- ⑥ イタリア ミラノ
- ⑦ KYO HIRAKAZU、ICHIMURA KAORI
- ⑧ ベルギー アントワープ
- ⑨ モナコ公国 市長 ジャン ルイ メディソン
- ⑩ USA ボストン ハーバード大学教授 Dr. スチュワート夫妻
- ⑪ USA サンフランシスコ 市長 アート アグノス
- ⑫ KYO HIRAKAZU、KYO RUI
- ⑬ フランス パリ 宝飾デザイナー ピェール ユゴー (文豪ビクトルユゴー未裔)
- ⑭ タイ バンコク バンコク銀行 頭取 チャトリ ソフォン バニッチ夫妻
- ⑮ ベルギー TV局 ニューススタジオ
- ⑯ KYO RUI、KYO MAYUMI
- ⑰ フランス モンペリエ市 市長 ジョルジュ フレッシュ
- ⑱ モナコ公国 市長 ジャン ルイ メディソン、マダム ハザマ
- ⑲ スイス ベルン 工業デザイナー ルイジ コラーニ
- ⑳ USA ジャズプレイヤー ハービー ハンコック
- ㉑ USA フロリダ プロゴルファー アーノルド パーマー
- ㉒ USA ハワイ 元ハワイ州知事 ジョージア アリヨシ
- ㉓ KYO HIRAKAZU
- ㉔ フランス ニース マダム ハザマ
- ㉕ ICHIMURA KAORI
- ㉖ フランス ベルサイユ宮殿
- ㉗ タイ バンコク メトログループ会長 サワン ラオハタイ
- ㉘ フランス パリ セーヌ川 KYO MAYUMI、KYO HIRAKAZU
- ㉙ フランス パリ プローニュの森
- ㉚ ベルギー
- ㉛ イギリス ロンドン KYO HIRAKAZU、KYO RUI、KYO MAYUMI
- ㉜ フランス パリ
- ㉝ USA ハワイ
- ㉞ USA ボストン公園
- ㉟ USA ハワイ

インターネットテレビで世界と向き合う

メディアについて――

まずインターネットテレビのことから始めます。

その前に、許平和自身は、メディアについてどんな考え方をもっているのでしょうか。

「もういつそのこと『神の領域』を手に入れようと、思ったかな（笑）」

彼は、インターネットテレビを始めた動機を語りながら、ついこんな本音を聞かせてくれました。

神といっても、誰も逆らうことのできない権力とか、不可能を可能にする超能力とかを、手に入れたいわけではないでしょう。

音楽家が身につけた技術と表現力を、最大限に発揮できる最高の楽器を欲しがるように、メディアを通じた仕事を成し遂げていくために、語り手、つくり手、送り手のすべてを自分で実行できる設備とシステムを、彼は必要と感じたに違いありません。

普通の場合に人が望むような権力とか、財力について話をすると、「そういうものがほしいと思ったことはないよ」と、少し笑みを湛えた真顔で彼は言います。まったく、コンプレックスのない人は、風邪をひくことのできない人のように（ちよつと違うか）、ある意味困ったものです。

私なんかは、そういうとき、悔しがつたりひがんだりする代わりに、幼年期というものが人間に対してもつ偉大さを、目の前にいる人のイメージの豊かさとして感じ取り、心の平静を保ちます。

上品な正しさ、嘘のない豊かさは、偉大な幼年期を体験し通過してきた人だけが、本当の特権のように、ずっともち続けるのだと思う。

これから何度も言うと思うのですが、ここのところはお金のあるなしや、家柄のよしあしだけでは決まらない要素。だから自分にも可能性はあったと思います。しかし、実際は、「二代にして成らず」（親と子の関係だけでは無理）ということわざ通り、代々の家族の精神的蓄積みたいなもののあるなしを、感じずにはおれませんでした。僭越と傲慢を承知というなら、「勝てんなあ……」としみじみ思う瞬間です。

許平和自身による、新しいメディア論の一部を、「変化するメディアスタンダード」と題した論考の中から引用します。

メディアとは、改めて問うまでもないが、新聞・雑誌・テレビ・ラジオなどが人々の頭に浮かぶであろう。

事実この四大メディアは時代を動かし、歴史を作り続けた。

誤解を恐れずに表現すれば、聖書・コーラン・経本なども、究極のメディアとっていいものであろう。

それは神を作り、信仰を助け、文化を創造し国家まで構築する力を見せつける。

これは昔々の話ではなく、現代に脈々と受け継がれているのである。

結果、悲しいことに争いも生むことになる。

経験と知識を備えた現代人でさえ、何世紀も前にその宗教的メディアに記された言葉に、翻弄され、惑わされ、常軌を失った行動をとる。

しかし、ローマ帝国の図書館からスタートした知識の貯蔵、想像をかき立て

る文学・音楽・芸術。人類が人として成長する糧としてメディアは素晴らしい功績も残しているのである。

その点においては、新聞・雑誌・テレビ・ラジオなどに代表される近代メディアも役割は大差ない。人々は新聞を読み、テレビを視聴し、メディアが流す情報や思考を、自身の思考と疑いもなく同期させてきた。

これはどういうことであろう。そう、メディアとは、形式や伝達方式が違って、人間にとって神に近いもの、いやまさにゴッドブレスそのものなのである。

ここには許平和のメディアに関する重要な考えがすべて込められています。

科学技術や情報システムの進歩によって、新しい富がもたらされたことは確かだけれど、人間の理性や思考力が進化したり高度化したりしたわけではないことが、メディアを客観的に見てきた冷静な立場で受け止められています。

そのうえで、メディアのよいあり方に対する理想が、経営者の発想より、アーティストの発想に近いところで、情熱を込めて語られています。

それとともに、情報で人を翻弄し惑わせるメディアのありように対する怒りが読み取れます。また、メディアの送り出す情報を享受する一方で、それに支配されてもしまいう現代人に対する、悲哀のようなものも感じました。

悲哀といっても、日本人的なセンチメンタリズムや浪花節とは、たぶん無縁です。一般大衆の感覚と生活に、すべての価値の源泉をみているのです。しかしだからこそ、自らの価値を理解せず、それを傷つけたり手放したりする大衆の行為には、味方としての場所から激しい怒りの矢が飛んできます。

人を誘導し惑わせる情報、品位のない情報、不正確で無責任な情報、偏った情報を、誰より嫌っています。ですから、国のため、家族のため、子どものため、女性のため、平等、民主的、人権、正義などのマスコミ用語を、自分の番組のなかでも、新聞や雑誌の公的な発言のなかでも、むやみに発しないようにしています。

きつと音楽家やプロデューサーや事業家として世界を飛び回り、ジャーナリズムやマス情報システムに深く関わりながら、仕事の現場でいろんな矛盾や不満も感じてきたのでしょうか。

いま私たちの社会では、テレビの「地デジ」（地上波デジタル放送）移行の話題が盛り上がるようになっていますが、さて、どんなものでしょうか。

二〇一一年七月二四日で現在の地上アナログ放送が停止されるのですが、「現在、地上デジタル放送が視聴できる地域は広がってはいるが、タイムリミットが迫っている」と許さんも現状をとらえています。

地上デジタル放送のメリットは、第一に細密度が高いきれいな画質を得られること。でも、デジタル方式に伴うデメリットもいくつか考えられます。

とにかく、新聞・雑誌・テレビ・ラジオという既存のメディアは、これまでインターネットの急速な広がりの中で、さんざん危機を叫びながらも、古い経営の体質や、送り手本位の製作姿勢を変えず、私たちの目から見ても、販売配信ルートの非合理性や、制作現場の質の低下が目立ってきています。

これらのメディアが、今後もインターネットと共存し、独自のポジションを確保していけるのかどうか、疑問視される面も多いといえます。

インターネットは様々な質の問題を指摘され、事実アナキーな様相もさらしながら、しかし確実に世界の視聴者の欲求に応え、高度なシステムとともにメデ

イアとしての安定性を手に入れてきています。

従来の人間のコミュニケーションや、情報伝達の仕方のうち、なくするには惜しいいくつかの形式が壊れ、伝統的な美意識や倫理観に反することがらも広がっていくのかもしれませんが。

しかしその変化の流れは、基本的な価値観や倫理観が変革され、国家や企業の思惑を超えて社会構造も変化をこうむり、経済と文化の領域から国々を隔てる境もゆっくり壊れていくという時代の訪れに、リンクしているのだと考えられます。

家族や社会のなかの、人間の基本的な関係と暮らし方は、不変であると信じられますが、古い価値観や道徳にばかり固執して、ことの上を判断している、親子の関係も、企業と社会の関係も、メディアと視聴者の関係も、うまくいかなくなるのが当たり前。

親は子に対して、為政者は国民に対して、経営者は消費者に対して、専門家や芸術家は素人や一般のファンに対して、より柔軟で高い見識と技量をもってもらいたいものです。

ところで、インターネットテレビというメディアをご存知ですか？

許平和は、「小さくても本物のメディア」を目指し、一九九八年に大阪市北区に「ネットチャンネルKYO（ケーワイオー）」を立ち上げました。

インターネットで番組（ニュース・映画・音楽・スポーツなど）を二十四時間配信し続けている。私たちは、誰でもパソコン画面で、その番組を無料で見ることがができる。そういうメディアです。まだ実際に活用していない人もいるかも知れないですね。

「ネットチャンネルKYO」の毎日

許平和は、ネットチャンネルKYOを開局し、自ら番組制作と、番組出演と、配信システムの保守管理など、技術的なサポートまで手がけてきました。局のある場所は、大阪の中心である北区の市街地。一九九八年に実験放送を開始してから十年。日本初の二十四時間の動画配信を続け、軌道に乗せました。

開設に際して、どれくらいのにニシャルコストが必要だったのでしょうか。許さんの資産力を前提に、確信に基づいた事業であったとしても、相当に思い切った

試みであったと思われまます。

継続させてもらったインタビュの内容をまじえながら、許平和の仕事レポートしていきます。

.....

テレビ放送をインターネットで楽しめる。これが「ネットチャンネルKYO」の第一の特徴。許平和社長の事業構想の基本もここにありました。

誰でも（世界中のどこからでも）アクセスできるのがインターネットのホームページ。そのホームページにテレビ映像を流し、視聴者はいったんパソコンに取り込まなくても、そのまま受信しながら画面を見ることが出来ます。つまり一般のテレビと同じような感覚で映像放送を受け取ることが出来ます。

現在は特殊な圧縮技術を用いて、携帯端末機出もパソコン同様のコンテンツを楽しむことができます。

テレビと同じように、決まった時間に決まった番組を提供するというスタイル

に、許さんはこだわりました。なぜでしょうか。

「普通、インターネットテレビといえ、利用者がプログラムから好きな番組を選び、それを取り出して視聴するオンデマンド方式がほとんど。しかし、私たちのKYOは、サイトに接続すると同時に、リアルタイムで配信中の映像が流れます。メディアと称する以上、視聴者の個々の趣味の世界に対応するのではなく、不特定多数の方々に、興味や選択の対象になる素材として多彩な番組を提供するのが、本来のあり方だと思っんです。視聴料はすべて無料ですが、番組の間にはコマシヤルが入ります。これらのことは、僕がメディアの自立性を確保するために、絶対不可欠だと考える要素です」

国からの助けも受けていない。大手企業の協同出資の申し出も断った。それは、彼が、パーソナルという自由な立場を核にすえて、メディアを維持し展開してきたという、最初の目的・願望に強くこだわったからこそその判断でした。

やはり、開局のためのイニシヤルコストに約一億以上のお金が必要だったそうです。当時まだインフラ整備が進んでいなかったため、「自分で光ファイバーをマンシヨンビルへ引き込んだんですよ」とこともなげに言う。コンテンツは、自らの音楽・

映画・テレビ番組についての知識、豊富な海外への人脈を活用し、自前でつくってしまった。

そして三十分単位の番組を、わずか五万円で販売。誰でもこの価格で、テレビに出て語ったり、自分の会社の宣伝や紹介をすることができるわけです（CM料金もべらぼうに安い）。

こんなやり方は、大きな施設と人員を抱えたメディアでは、やりたくてもできない。だてに小さく規模をおさえているのではないのです。

マンションのリビングルームがメインスタジオ。和室は講座や対談の場にはや変わり。いろんな人がひっきりなしに訪れるけれど、番組はすべて、副社長の一村かおりさんと二人で、MC（アナウンス・トーク）から、撮影、編集、放送まで行って二十四時間配信のシステムを守っています。

許さんにすれば、これこそが世界とリンクしたメディアのグローバルなあり方であり、いたずらに巨大化し、古い権威と営業上の利権にしがみついた日本の既存メディアは、ローカルな存在だということになります。

なるほどと思いますし、そういう知恵の産物が、本当の新しいさの象徴として、

大阪に存在することは、うれしいことだとも思います。

企業としての営利追求の論理が優先しすぎないように、余分な機械設備や人員の増強も考えなかった。だからといって、許平和のなかに、ボランティアとか、理想主義とかをよしとする古い発想は毛頭ありませんでした。

あくまでも、国や国境や宗教や習慣や環境を相対化できる個としての発想や視点を、理屈というより皮膚感覚として持ち続けていきたい。これが彼にとっての最大の課題であり、最大の希望でもあります。そのために、事業としての成立と、世界に向けて突き抜けていく発展が必要なのです。

「ネットチャンネルKYO」の展開には、許平和のクールでリアルな日本人への理解がふまえられています。

情報を、生活やビジネスの必要からだけでなく、精神的安定のためにも必要として入る一方で、情報を丹念に整理し分析する労力を嫌い、自身の語学力の欠如を解消しようという意欲もない。これが辛口でとらえた日本人像だとしたら、この日本人に最もフィットするメディアのあり方は、インターネットテレビだという判断は理にかなっていません。

抽象的な理念や、機能的なものの方にとらわれなくて、先端の情報技術のあり方と、日本人の日常的情緒的あり方を、きちんとつなげて分析しているところに、許平和のすごさがあると感じました。

長い道のりもひとつ飛び

——階段をコツコツ上るのがいいとは限らない

許平和という人物のバックボーンや、生い立ちや、経歴みたいな話をします。彼が、突然宇宙から飛来したわけではないことを知ってもらって、それからまた、先ほどご紹介したインターネットテレビ事業を核にして、さらに活動のステージを広げていく彼について紹介をしたいと思います。

「華僑」の歴史と現在のイメージ

まず、彼の家族的な出自である「華僑」のことから、ふれていきましょう。でも、こういう知識や教養の部類は、この本にとっても、あまり重要に考えないほうが良いと思いました。

やはり初対面で直接受けた印象と、現在の発言や立ち居振る舞いから感じ取る人間性や知識や体験の分厚さの方に、歴史や経済の本に書かれていたり、付き合い合いの長い方に教えられたりする知識より、リアルな「華僑」像があると、自分なりに信じたからです。

一般的に華僑とは、海外に出て暮らしている中国人（華人）を指す言葉です。

国籍や民族性の違い以上に、私たちと華僑の人たちは、違っているといえます。私たちと、許さんとの違いのルートも、やはりこの華僑のあり方と、許家という家柄にあることは確かだと思えます。許平和の現在の能力と人格は、長い歴史のなかで存続してきた華僑と、その中核をなしてきた「客家」^{ハッカ}の人々の、独自の生活文化のなかから生まれしてきたことは確かだと考えられます。だからこそ、中国の大地に深い根を下ろしながら、世界へ飛び立っていった華僑の人々について、正しく理解していないと、彼についての理解もズレてしまうでしょう。「客家」については後で説明します。

彼の口から語られる自身の家系についての話も、一つ一つ聞き逃せない貴重な情報でした。「試験に出る英単語」みたいに、その場で頭（心）に刻み込んでいきました。

あまり私たちと生活上の接点がないような、中国の名門の家系をベースに、昔の言葉でいうところの貴族の伝統的世界に生まれ育った人のことも、くだらないひがみや偏見さえ持たなければ、とても新鮮で興味深い事実に刺激されながら、学ぶことができます。

何でも本当のことが知りたいという、由緒正しい私たちミーハーの血さわぐではありませんか！

私たちの心のなかのタブーや、排他的意識や、被害者意識に彩られた隠謀史観や、知ったかぶりのエセ文化人思想や、マゾヒスティックなマスコミの平等主義に、頭脳の自由な回転を邪魔されなかつたら、許平和その人の口から出る辛辣でユーモラスな世相の分析や、政治経済現象への批判から、ただ事実を事実として知ることの「快感」をたっぷり味わうことができます（許平和さんの楽しみ方その一）。

よく華僑が比べられ、類似性を指摘されるのがユダヤ人ですね。

私は実際にユダヤ人の方々と華僑の方々が、お互いに仲がいいのか、悪いのか、よくは知りません。しかし、祖国を離れ、その民族的結束の力を生かして、商業や政治の世界で富や権力や名誉を得ていった歴史は、似ている（歴史的にも類似している）といって間違いないでしょう。

華僑についての書かれた本は多いですし、その民族的ルーツも、祖国から東南アジアをはじめとする世界各地へ、主に商業のノウハウを最大の武器として渡り、

果敢に生活の拠点を異国の地に求めた経緯も、たやすく知識として得ることができません。

彼らにとつての「商い」は、一族の伝統や才能である以上に、生きていくために必要なサバイバルの技術でもあったでしょう。

私のように、神戸や大阪で育ち、そこで社会との関係を広げてきた者にとつては、なじみになったジャズライブのレストランや、大きな商業施設のオーナーが、華僑の一族だということは、ままありました。

また一方では、学生るときから派手な色の外車を乗り回している人もいたし、厳しいおじいさんやおばあさんがいて、想像以上に質素な暮らしをしている人もいました。

許さんと華僑のつながりを語る場合に、華僑という世界の商業に多大な影響力支配力をもつ民族グループの、歴史的なあり方のことよりも、彼を育んだ許家という家系そのものの存在について知ることの方が、現実的であるように思えます。

ご存知の方も多いと思いますが、華僑と呼ばれる人びとのなかに、独自の生活文化と言語をもつ「客家」という民族グループがあります。客家には、特に名家

として有名な一族があり、陳家、宗家、鄧家、龍家、許家が五大客家と呼ばれています。許家は代々外交の分野の専門家として国の仕事を担うことが多かったようです。華僑一族全体にいえることだと思いますが、教育にも熱心な点が知られています。

客家出身で、歴史上有名な人物は、儒教の祖である孔子をはじめたくさんいるのですが、近代以降では、中国革命の父といわれる孫文、元中華民国総統の李登輝、シンガポールの元首相リークアンユー（李光輝）といった方たちがいます。近年中国共産党のトップとして政治力を発揮し、開放的な経済政策を進めた鄧小平も、客家の出身です。

もともと古代中国の時代から、政治・文化の中心であった「中原」（黄河の中下流域の平野部）にいた漢民族のうち、南下して広東省・江西省・福建省の境目あたりに定住したグループが、現在の「客家」の祖先であるといわれています。そこから世界へ、秀才や学才と労働へのパワーを武器に飛躍していったわけですね。昔、教科書で華僑の歴史を少し習ったとき、苦労と同時に大きなロマンを感じました。

中国の歴史の中心をなした漢民族に源を発する客家。国内の民族的な生存競争のなかでも、彼らは誇りと結束というアイデンティティを失わず、サバイバル能力の高さで華僑勢力の中核を形づくっていきました。

はじめから国際人という生い立ち

許平和さんは一九五三年、許家の筆頭（たいばん太人）の長男として香港で誕生しました。ということは、彼は許家一族の「長」となるべくして、生まれてきたということです。

伝統的なききたりと生活文化をもつ華僑の人びとにとって、一族の家系と血縁を保つということは、一つの家族を超えた戒律でもありました。許さんも生まれてすぐに両親、特に母親からは離され、一族のサポートのなかで一人育てられ、幼くして自我形成の試練に直面したわけです。寂しさに根ざして豊かになる情操を、音楽などへの熱中で個性として深めながら、自立や自己責任への観念は、いやでも鍛えられたと思われれます。

この経験が、生まれながらにして、どこの国の、どんな人とも、臆せず話したり付き合ったりできる国際人としての素地を、培ったといえそうです。

両親と一緒に住むようになったのは、十二歳のとき。場所は兵庫県の神戸市です。父親の仕事の関係で、許平和は神戸と結びつき、カナディアンアカデミーというミッションスクールで学ぶことになりました。いわゆる中学生の時期で、彼自身は明るく屈託のない少年でしたが、社会に対しても、家族に対しても、そのふるまいはすでに現在と同じに完成していたといわれます。

私が許さんから聞いたお話のなかで特に印象的だったのは、「家族を演じる」という言葉でした。自分と親との関係において、また自分と子どもとの関係において、彼は「家族を演じる」ことの大事さを述べたのです。

「演じる」とか、ふりをするとかの言葉から、私たちは何か不純な関係のあり方や、偽装や欺瞞といった生き方を連想するのではないのでしょうか。しかし許さんが強調した「演じる」ことは、まず家族にとっての価値観を身につけるために、次には、それぞれの立場に立って、相手の気持ちや立場を思いその力になることのために、必要な段階だということでしょう。

ベタで、ただもう溺愛したり盲従したり、私物化したり反抗したり、という無意識だけで成り立っているような親子関係の、対極にある醒めた倫理が感じ取れます。醒めているけれど、家族や夫婦や親子の価値を深く信じているから、ひんやりしたイメージがないのでしょうか。

単なる儒教的な道徳とちがうのは、そういう教育（徳育）が、結果的に個人が個人として、家族や一族とともに、世界の中で生き抜いていくための力になる、というリアリズムが、経験的にしつかりふまえられているからです。

どんな教育も、自己形成も、発見も、技術の上達も、まず形から入るという点でも、「親子」や「家族」を忠実に演じることが、ホンモノの關係に熟していくための第一歩だということは理解できます。思い切りただ抱きしめることが大事であるのと同時に、適切な距離をとって、遠慮や妥協を排しながら、心のコミュニケーションを成り立たせていく。そういう育てられ方をして、育てた人を受けとめて、許さんの今日があるのだと思います。

家族以外の他者との出会い、自分への期待に対する対応、責任ある立場への自覚……。こういう、私たちなら青年期の出口でようやく意識的になるような課題

と、彼はきつとどんな体験より早く幼年期から向き合っていたのでしよう。

明るく無邪気でさえある少年らしい態度の奥で、冷静に自分を見ているもう一人の自分。それが最初の友人であり、父母の代理のイメージであり、未知なる神との対話の始まりだったのではないでしょうか。尽きない興味を覚えます。

また、許さんは、あるインタビューに応えて、語学と自分についてこう語っています。

正規の教育は英語とフランス語で受けてきました。ですから、英語、フランス語、日本語の順で言葉が使えますが、中国語はできません。しかし、これは問題ではありません。なぜなら、国は栄枯盛衰します。一族は滅びませんが国は滅びます。この考えにたてば、漢民族の客家の筆頭であるからといって中国語を喋らなければ理由はありません。我々が伝えてきた知恵は今後益々重要な意味をもつと思います。現在の日本で起こっている現象をみれば、国家に盲目的に従がう事の危うさや、国家というものがそもそも信じるに足るものかどうか、日本の方にも分かかってきたのではないのでしょうか。この前の戦争の教訓を

忘れていますよね。

絶対的な力や愛にひかれながら、もつと細かく価値観を割り裂いて、誰の話し相手にでもなれる受身の対応力が、不思議な成熟度を醸し出していたことでしょうかね。

卒業後、早くも本格的な音楽家としての道を選択し、アメリカ・ボストンのバークレー音楽学院作曲科へ進みます。

理数系が好きだったので、コンピュータなどにも早くから精通していました。そこでさらに、専門的な知識や技術を身につけようと、最初は、マサチューセッツ工科大学（MIT）を受験。しかし世界中の秀才や天才が特殊な受験準備の末に挑む難関だけに、この試みは不成功に終わりました。

でも幸運が待っていた。当時バークレー音楽学院では、シンセサイザーを使った音楽教育の試みがスタートしていました。しかし、音楽とコンピュータの両方に精通した人材がいなかった。そこで彼が推薦されて研究生として入ることに。しかもその頃、映画の世界でも、コンピュータで映像に合わせた音楽を付けて

いくようになり、その仕事が学生である彼のところに入ってきました。

もともと好きで努力して、身につけた音楽とコンピュータの技術でしたが、勉強や資格取得や下積みの階段を上ることもなく、いきなり世界最先端の映画製作現場で仕事として生かすことになった。「こういう星の下に生まれた」と言うしかない話です。

このときの経験は、もちろん現在の映像配信の仕事の上に生かされています。

彼はアメリカで、世界中から集まる才能たちと付き合いながら、インターナショナルなセンスを磨きました。許家がもともと外交という分野に明るい家であったので、祖父の代から世界各国の政治家や貴族階級の人びととの交流もあり、許家の長男である彼は、おのずからその交流を引き継ぐかたちで、国際的な関係の輪を広げていきました。

その後もアメリカにとどまり、ハリウッドの音楽プロデューサーとして活躍。帰国後はテレビ各局の番組のテーマ曲や、CMソングの作曲などを手がけるのですが、一九九四年には、英才教育で知られる上海音楽院の客員教授に就任。

同時並行で、国内外のメディアで、番組や音楽の制作に携わってきました。日

本やフランスの、テレビ局でニュース番組のキャスターを務めたり、ラジオのトーク番組で発言して話題になったり、そんなことも、彼自身に大きな刺激を与えてきたようです。

この華々しくも多忙な、一人何役にものぼる活動のすえに、「自分のメディアをもちたい」という欲求が宿り、あつという間に実現させてしまったわけです。

富や一族の歴史を背景にした存在力は、はじめからあつた。だから自分の存在感のバランスをこわしてまで権力や財力を求める必要なんかない。

安定した情操に満ちた家族世界も、道を間違わなければ保てる自由も、はじめから自分で身につけていく可能性のなかにいた。だから、うそ臭い平和や自由について語る必要はなかったし、政治的立場で自分を彩る趣味もなかった。

逆に、政治的立場で飾られた人格の貧しさや、理念で振舞う人々の自己欺瞞は、日本でもいやというほど見てきたということですよ。

世界人というフィールド

—— 国や文化の違いはきつと超えられる

許平和にとって、「グローバル」とか、「国際人」とかいうもののイメージは、私たち日本人が普通に使う意味と違うような気がします。その違いは、やはり華僑という出自と関係あるように思えます。

私たちが「国際人になる」という場合、日本という枠のなかに身を置いて、そこから出て行って外国や国際社会と交わり、そこで通用する知識や技量やセンスを身につけ、自分の仕事や行動範囲や人間関係を広げる、という感じですね。

許さんの場合、そのかわりや行動の幅を広げていくことは、国という枠そのものを、個人が超えていく、より自由になりながら自分を実現していく、というイメージが貼りついているように思えるのです。許さんにとってはそれが当たり前前の価値観なのでしょう。わかったようで、なかなか実感できないことであったように、私なんかは思いません。

これ以上のことは、私には語れませんので、許さんの考えや基本姿勢がよくわかる、インタビュ記事や、メッセーシなどを、切り張りに集めてみます。出典は彼自身が運営する組織「サンクチュアリ・インターナショナル」（後で紹介いたします）の機関広報誌です。

だいたい前の記事もありますが、今からその時期を振り返って、その見解や情報の確かさや鮮度を推し量ってください。

中国の音楽への試み

Q 許さんの活動は一言では話せないほど多岐にわたっていますが、まず上海音楽院の入学は非常に難関と聞きましたが。

A 中国全土で国立の音楽院は上海と北京に二校あるだけです。八歳から大学まで一貫教育を行っていて、入学の厳しさは日本の方の想像を超えています。試験は八歳の一度きりで、浪人や再試験は認められません。ピアノ科の場合、本人の指のレントゲン写真から両親の骨格まで、のべ一週間にわたる試験になります。合格すると出身地の名誉ある代表者になれるわけですから、地元ではお祭り騒ぎになるほどです。彼ら入学者は出身地はもとより、中国国家から選ばれたものとして威信をかけて勉強に励みます。

Q その中国で音楽家としての許さんのめざすところは何でしょうか。

A 中国にも良質なポップスとか歌謡曲とか呼ばれる音楽が育つことを願っています。教育機関はご存じのようにすべて公立ですが、私がめざす音楽教育というものは必ずしも公立の機関で実現される必要はありません。音楽の教育は大雑把に言って費用がかかる側面がありますが、それを全国一律の授業料でまかなってゆくには無理があります。私立の音楽院が設立されて、いろんなジャンルの音楽教育ができればと念願しています。スポンサーさえつけば、私立の音楽院設立は中国でも可能だと思います。

Q 日本の映画音楽やポップス系音楽の作詞作曲をされながら、一方ではユーロ・ディズニーの音楽監督も担当されたとか。

A フランスのディズニーランドについてはアメリカの本社から直接に依頼されました。ご存じかもしれませんが、中国でもディズニーランドを建設しようという動きがありまして、種々の問題のために実現には至っていませんが、もし出来た場合には私が音楽を担当することになると思います。

中国のインターネット事情（ベルギーテレビ・VTM局出演の報告より）

《香港返還を目前に中国・台湾・朝鮮・韓国などアジア諸国の動向についての特別報道番組にコメンテーターとして出演依頼があり、お受けしました。

番組ではアントワープ大学や政治家、マスコミ関係者などから、そうそうたるメンバーが出演し議論は白熱しました。

特に、政治運動の規制、結社政党などの禁止または規制、デモなどは十日前までの許可申請など、返還が近づくにつれ中国当局の共産主義的姿勢が見えてきました。これについて、当然のごとく反発発言が多く出ました。

また、私からの情報として、香港では電話料金が安く英語圏でもあるということで、インターネットやビデオオンデマンドなどコンピューター情報通信がビッグビジネスになっています。

さらにシンガポールや台湾の通信事業社が多額の投資を香港に行って、引き返せない状況になっています。

ところが、新行政府の発表に香港のマスコミ、コンピューター・通信事業各企業は震撼しました。それはインターネットをはじめ通信・映像・マスコミすべてにおいて公安局の検閲が入るという発表でした。

インターネットに対しては公安局が設置するプロバイダーに統括され、有害な情報はその時点でカットするというもの。これは現実的に全部を検閲することは不可能であり、結果的に当局の意向に添わないものは全て規制する流れになるでしょう。

現在、中国本土でのインターネットは全て公安局で管理監視されており、簡単にアクセスできない状態になっている。また、返還にあわせて中国政府はインターネット・ホームページを立ち上げることになり、自分たちではデザイン制作できる能力がないので香港のコンピューター企業に制作依頼した。すでに一昨年末にデザインが出来上がり行政府に提出したところ、未だOKの返事がない。これに業を煮やしたコンピューター企業代表が北京に向き担当部局の要人と会合を持った。

そこでわかったことは、デザインの出来不出来ではなく長期間待たされたのは、

ホームページ運営のため今後の情報提供を香港コンピュータ企業にしているのかどうか、誰が責任を取るのかが問題になっていた。

このようなレベルの低い現実には、ヨーロッパのように情報を公開し一つの共同体になろうとしている今、出演者達の理解を超えることで、全ては「不可解な共産中国」となってしまう。番組の結論は、最悪のシナリオとして最初は思想家、知識人、マスコミ、企業家そして多くの難民が香港から流出するだろうということでした。

それと、最後まで日本はどうかとの話題は出ませんでした。ヨーロッパ知識人にとって日本は興味も持てない国になっているようでした。》

香港クラッシュ！

《いよいよ香港返還の期日が迫ってきました。最近特に、お会いする方々が同様に返還後の香港情勢を質問されます。

香港で生まれた私としては、「五十年間は現状維持する」との中国政府声明を信

じたいのですが、現実には非常に危機感を持っています。それは香港や世界中の華僑社会が持つ歴史が物語ります。

約五十年前、中国が共産国家になり、蔣介石が台湾に、リー・クワンユーがシンガポールに、多くの名家・知識人・経済人が共産国家を嫌い世界に散りました。もちろん許家一族も香港に生まれました。

当時、中国共産党は知識人や経済人、世界にネットワークを持つ華僑一族に対して「中国共産党は建国のため協力依頼すると共に優遇する」と声明を出しました。それに対し、住み慣れた土地を離れたい老人や、自身が持つ知識や財力を新しい中国に役立てようと信じて数多くの人々が残ったのも事実です。結果はどうなったか、ほとんどの知識人は意識改革と称して重労働や死刑に、土地や財産も没収され老人達は、海外に裕福な華僑一族を持つ者として、スパイ容疑や資本主義の手先と決めつけさらしものにされたあげく、投獄や強制労働など筆舌に尽くせない苦しみと辛酸をなめさせられた。

又、文化革命運動の際にも、同様に多くの人がホロコーストの世界を味わいました。このことは海外に出た華僑はよく知っており、本土に残った一族や友人達

を心配し、あらゆる手段で救出するために活動していました。

もちろん一般の中国人も我慢できず、違法に自力で出国する者も多く、ほとんどが香港に出ているのです。

このように香港は、共産党政府嫌いが多く逃げ込んでおり、その多くが香港でマスコミや大学教授や知識人、大物経済人として活躍しているのです。

ここまでお話しすれば、今回の返還が香港人にとっていかに危機感をもって受け止められているかわかりでしょう。乱暴な言い方をすれば、中国政府にとって香港は反政府犯罪人や資本主義者の巣窟であり、「反政府犯罪者に対して、いかなる約束も守るべき責任はない」または、「共産主義を汚染する輩はつぶしてもやむなし」と言われれば、それまでなのです。まさかそんなことはないだろうと考える方も多いのですが、華僑は建国時の「中国共産党は建国のため協力依頼すると共に優遇する」とのウソや文化革命での恐怖政治を忘れていないのです。

さらに香港では、新華社香港社長・許家屯がアメリカに亡命、経済部長も後を追って亡命、現在中国に対して民主化運動を訴えている。この事件が与えた衝撃は非常に大きかった。新華社香港は事実上の在香港中国大使館に相当し、代表で

ある社長は党中央の信頼も厚く中国政府大使としての役割もあつた人物である。

また、友人でサンクチュアリメンバーであるエバグリーン社（台湾を代表し世界でも有数のコンテナ―海運企業）代表・張榮発氏によると、一九九七年一月（六月（返還前日）まで香港発のコンテナ―輸送は満杯状態で新規の受付を締め切っている。

確かに香港は中国経済にとって財産ではあるが、中国共産党が最も大事にして
いるものは社会主義イデオロギーである。これがわかれば、私の危機感も理解して
いただけるだろう。》

乗り遅れた日本のメディア（孫氏・マードック氏のテレビ朝日買収劇についてのコメント）

《彼のことはコンピューター関連雑誌の社主として知られていますが、特に話題
になつたのは世界のメディア王・マードック氏と共同でテレビ朝日の買収に入っ
たことでしょう。孫氏は在日コリアンとして生まれ、米国に留学後日本に帰国し、
その後ソフトバンク社を設立しています。

話題はやはり世界のメディア王・マードック氏との共同戦線のこと。マードック氏は衛星デジタル放送世界メディア帝国構築のため日本に上陸し、パートナーとして孫氏を選んだ。

二人は日本のテレビメディア・テレビ朝日の買収に入り、ほぼ目的量の株入手を果たした。

これは昨年話題になりました。日本の基幹産業である自動車メーカーのマツダも米国の手に落ち、とうとうテレビも外国の手に落ちた。

それはともかく、ここで突然日本の国粋主義的思想が出てくるのです。日本人や日本企業が海外侵略するのは当たり前、反発があれば金で解決すればいい、所詮実力が違うんだからと胸を反らす。

事実、バブル時代に日本人がニューヨーク・エンパイアステートビル、ユニバーサルスタジオ、数々のホテル、ゴルフ場を買いあさり反感を買っていた。あまり日本への報道はなかったのですが。

しかし、外国人や外国企業が日本の基幹産業に進出するのは許さない、反応は非常にヒステリックでマスコミ全部がまるで黒船が来たような騒ぎ。

特に、テレビ朝日のもう一方の大株主である朝日新聞社のヒステリックな反応は常軌を逸していた。日本のテレビが白人やコリアンの配下に落ちるなんて許されることではない、というのである。

結局、この子供っぽく幕末のような反応にあきれた両氏は、「今後の好意的な協力を希望する」という中身の無いコメントを残し、持ち株全部を朝日新聞社に売却した。ここで重要なのは、この株を購入価格で売却したことだ。

私が「そんなにヒステリックに進出を拒み、株の買い戻しを希望しているのだから、倍ぐらいの値段で引き取らせたらどうなの」と聞いたたら、それこそ夜は一人で外出できなくなるよと笑っていました。

私が、「もし私がテレビ朝日サイドであれば、これを機にマードック氏のネットと、孫氏を窓口にして、世界へ展開するだろうな」と話すと、「それを期待していたんだ」という答えでした。

どちらにしても、これで世界で展開しつつある新衛星情報ネットワークに乗り遅れたのは確実でしょう。

日頃から新聞やテレビは、「世界に開かれた日本であるべきだ、日本は真の国際

人になるべきである」と発言してるのに、現実には「これで日本民族は無傷だ、白人やコリアンにかき回されてたまるか」——この有様である。」

日本経済は崩壊前夜

《株価が本年度最高値をつけた。

それは、アメリカ市場の好調に引っ張られたものだ。しかしこの実体は本当でしようか。

際限なく上がり続ける株価、落ちることのない景気などありえない。それはブラックマンデーやバブル崩壊、古くは一九二九年からの世界恐慌など、何度も経験しているではないか。

実質景気復活の実感のないまままでの株価の高値など、なんの確実性もない。

アメリカはここ数年経済が復活し絶好調、しかし友人のアナリスト達はアメリカの株価は七五〇〇ドル前後が限界、それ以上は現実の伴わない期待感だけの夢の話になる。

いまアメリカの株価は七〇〇〇ドルを前後して限界点に近づきつつある。中でも日本で利益を見込めない資金（個人・企業・銀行・保険）が流入し、株価を上げる要因になっている。

ここで、一気に限界を超えたらどうなるだろう。ウォール街が機能停止しおろを受けて日本の株も止まってしまう。多くの資金を海外運用に投資している保険・銀行に対して預金引き出し、契約解消に走る人々。

前回のブラックマンデー当時では、日本の銀行倒産や保険企業倒産など想像もできなかったので、人々は預金引き出しに走らなかったが、今ではどうだろう。

当然のごとく支払い停止・解約停止になり、さていくつの銀行が残るのでしょうか。一千万円までは保証されるとか保険は引き継がれるとか、それは今現在の話で一旦崩壊し始めたなら理論上だけの話になってしまう。

私はアメリカが引き金となる日本経済崩壊が近いと感じている。年末にいや意外ともっと早いかもしれない。》

地球資産をターゲットにするチャイナパワー

《一九八〇年代は、バブルでパンパンになったジャパンマネーがアメリカやヨーロッパ、オーストラリアに向かいました。このとき海外のマスコミには「黄色いユダヤ人・YELLOW JEWS」と表され、良くも悪くも話題の中心になっていたのですが、大蔵省と銀行資本さらに国際感覚のない経営者の護送船団がみごと沈没した後は、今日の有様になっています。

「黄色いユダヤ人・YELLOW JEWS」と言われた割にはユダヤ民族の策略としぶとさも無かったのが現実。

そのころ華僑は、香港返還を見越して香港住民のためバンクーバーに巨大資本を投入、移民を見越してのビジネス展開を実行していました。

すでにリッチモンド市のビルのほとんどが華僑資本で構成されており、バンクーバー・ダウンタウン再開発資本の八〇%が華僑資本になっています。

香港から移住が許可されるのはアップパークラスのみに限られており、その経済

効果は計り知れないものだと思像されます。この現象はカナダだけではなくオーストラリア、ニュージーランドなので同時進行しています。

華僑系の不動産オフィスには、「地球資産」という不動産情報誌が無料で配布されており、これには日本も含む世界の不増産情報・価格が週刊で掲載されている。もちろん直接物件にオフアードできるシステムになっており、敏速に行動できることになっている。

さらに、ベルリンの壁崩壊の以前からベルリンやプラハ、ブタペストのビルや不動産を買い占めていた華僑の行動と実態は日本に報道されていない。

家族と自身の金で敏速に行動する華僑は、変化のスピードが加速している現代への適合能力が日本人より格段に優れており、大国アメリカは「二十一世紀の繁栄のシナリオ」を華僑を窓口にした中国と検討を始めています。

この枠からはずされた日本はどう行動するべきなのでしょう。》

ありのままニッポン

——古くさい理念より瑞々しい直感力

「齒に衣を着せない」というのは、余計な配慮や気遣いを捨てて、誰にはばかることもなく言いたいことを、正しいと思うことを、その場で言ってしまうこと。

でも言いたいことを言って、人の共感を得るのは易しいことではない。テレビの討論番組で、それを売り物にして、言いたいことを言う人を演じて、でも底が知れて飽きられて馬鹿にされる。そういう評論家やタレントや政治家はいつの時代にもいました。

正しいことや、厳しいこと。それは、見る角度やシチュエーションによっても、その時代の価値観や生活状況によっても、違ってくる。だから、単純な視点で「大胆に」モノを言われても、笑えないですね。

笑いが取れないのは、言葉を発したその瞬間に共感が得られないから。

あんなことは誰だって思っているが、言っても仕方がないから黙っているだけだ。あんな大げさな「正義の味方」づらは、自分の弱さや醜さを隠したつもりで自己欺瞞に過ぎない。みんなそう気づいている。

そしてお腹の中で言うお定まりの悪口は、あの人はいいご身分だから、いつも安全な場所から、他人の欠点や過ちを暴いていい気になっている。逆におとなし

い人だって、「金持ち喧嘩せずで優雅なもんだ」といわれてしまう。

許平和の、遠慮のない正論の述べ方や、本当のことを（笑いととも）言ってしまう困ったクセ（？）は、ご本人もよく承知ですが、決して作られたポーズでも無意識な放言でもない。

彼の発言の特徴は、「裏目」がないこと。いっどんな立場から、どんな視線で見られても、簡単に皮肉られたり、くつがえされたりするスキがない。番組や取材記事のなかの発言を詳しく調べていてそう思いました。

文章で勝負する評論家などと違い、常時発信されるメディアのなかで、実際に顔を大衆にさらしながら、リアルタイムに発言しつづける人間のなかで、これは希有なことに思える。受け取る人たちのなかに、反対意見はあって当然だけれど、まず言論人としては、それがホンモノの考えであるという、信頼を得ることが大事です。

でも、不信と保身の感情が渦巻く世界では、自立した精神で物事を分析し、判断を下すことが難しい。ポーズだけで通用する時代でもないし。

かくして、メディアを通して本当のことを言える人は、少ないのです。

知識人や政治家は、まだ大衆〓リスナーをなめている(なめるしか能力がない)のかもしれないけれど、リスナーは瞬時に、その声や表情からさえ、信用できるかできないか、わかってしまうのだと思います。

ネットチャンネルKYOの看板であるニュースやインタビュー番組も、そういうリスナーの厳しいリアルな視線を受け止め、クリアし、味方にしながら、今日の人気を勝ち取ってきたのでしよう。

なにしろいまは、ニュース番組からバラエティまで、反対する気にもならない幼稚な「正義の味方」づらや、古くさいイデオロギーの丸写しや、自分のことを棚に上げたお説教や、もてたいだけの自慢話ばかりがあふれているような気がします。

言論や、そのほかの言葉を使った自己表現で、生きていく立場を選んだ人にとって、たえず公共のメディアに顔を出し、しかもリアルタイムに配信される放送番組のなかで、自分の意見を言ったり、返ってくる質問などに応答していくということは、大変リスクの高い行為だと思えます。嘘とレベルは、すぐばれるし。

そのかわり厳しいリスナーの目や耳を通して、確かな信頼や親しみをえること

ができたなら、どんな小さなメディアから出発しても、世界規模の支持を得ることが可能。

それが現在のネット社会（世界）のもつ可能性であり、怖いところだと思いません。

悪く管理されるとか、悪く利用されるとかいう、怖さと背中合わせにあるようにみえるインターネットの世界。

しかし、本当の可能性は、受け手である世界中の大衆の手にあるのだと、私なら信じています。この考えが楽天的に思われるとしたら、その人がセンチメンタルな善悪の区別や、理念に守られた幸不幸の観念にはまっているからではないでしょうか。

もともと、私たちの個々の人生や、家族との生活は、社会とべったり同調して横並びになることによってではなく、社会に対してリスクを負いながら、社会のなかで、自分の希望を実現したり、家族の幸福を獲得したりしていく、ということだったと思います。

その意味で、許さんの生き方や、家族一族のあり方は、私たちも参考にできる

と感じられます。

世界中の大衆（つまり情報の受け取り手）の、自身の生活や家族や快楽や知的満足への価値観をベースにした判断力は、悪い管理や、悪い利用のもくろみを、必ず超えてしまうに違いない。スーパーマーケットや量販店の浸透で、消費者がメーカーの価格を変え、小売店の価格を決定し、社会構造を変えていったように。消費は、情報の活用とともに、国民大衆の、国や社会に対する、一番主体的なアクションだという考えは、許さんの経済やメディアに対する発想の基本にあると思われます。

媚びることとは関係なく（そんな必要はないから）、一般の大衆（消費者）とりスナーに対する信頼がベースにあるということでしょう。

例えばパーソナリティ許平和の自由な発言が、政治的・宗教的目的を背後に隠したものであったら、真っ先に気づくのがリスナーだと思います。

対象が何であっても、言葉やアートに対する熱狂的ファンは、自分の感性や価値判断の正しさに酔えるのであって、感性や価値観を惑わされて酔うわけではない。そんなファンもたまに間違ふことだってあるけれど、自分ががつくりするだ

けで、他人や社会に迷惑かけることはないでしょう。

とにかく、国や巨大勢力のたくらみが技術的に実現可能であっても、情報の受け手の側の、生活感覚に基づいた元気な価値観が、抑えられたり消されたりすることは不可能だと考えられます。

抑えたり消したりすることが、世界の政治や経済を運営する国や巨大勢力にとって、トクになるとはかんがえられないでしょう。そういう意味では、戦争や、軍事力や政治体制による抑圧や、経済的独占という政策が、彼らにとって効果的な時代は終わったといえるはずです。

確かにそのはずなのに、既存の大新聞なんかは、経済や文化の側に開けている可能性の側にしつかりした価値観をもてないまま、古い政治的対立構造や、進歩的イデオロギーに頼った言論で、意地汚く自分の立場を守りながら、世間をリードしようとしている。遅れた方がリードするのは、つまり足を引っ張っているのと同じ現象であり、ちっとも進歩的でないから、早くやめてほしいと思います。

古いメディアを運営する、古い価値観の経営者が、ホリエモンに会社をとられそうになったとき、「金さえあれば何をしてもいいのか」と、経済（経営）の問題

を倫理や道徳の問題のようにすり替えて世間の共感を得ようとしたとき、私たちは村上春樹の小説の主人公のように、「やれやれ」（やになっちゃうなあ）（仕方ないなあ）（さて、冷蔵庫の缶ビールでも飲もうか）と思いました。

また、前の前の前の総理大臣がものすごく高い支持率をもったとき、「ポピュリズム（衆愚政治）」と呼んだり、「一般大衆は彼の演出に騙されている」などといって、さかんに揶揄していました。持ち上げたり引きずり下ろしたりする行為には、ジャーナリスト特有のコンプレックスが露骨にあらわれていますが、これらの発言は、ものすごく「一般大衆」に対して失礼であると思う。

許平和の発言は、言葉はやわらかいのですが、政治家に対する批判も、国民に対する批判も、斜めから皮肉るような陰湿なやつではなくて、正面から奥底を叩いてきます。

ホリエモンや前の前の前の総理大臣に、どんなひどい欠点や間違いがあったとしても、その支持のされ方には確かな根拠がある。多くの政治家や経営者が対応不能になっている、時代の変化や価値観の変化のなかで、支持されたり信用されたりする理由があったわけです。解説や批評は必要ですが、批判するならば、一

番本質的で、現実的な（私たちの生活の価値観に直結するところで）批判をしなければダメじゃん——これは、許さんの口まねでした。許平和の言葉は、普段も、旋律とリズムがあつて、音楽的な心地よさがあるのです。

口まねだけでなく、ここで私が書いているメディアとそこでの「自由な発言」についての意見は、経営者としてだけでなく、ひとりのパーソナリティとしてもメディアに関わる許平和さんの、基本的な考え方を自分なりに編曲したものだ。

アレンジが間違っていないか、ちゃんと事前に作曲者にチェックはしてもらいます。

度胸や野心によって、選べるようなものではない。けれど、実業者と言論人としてのリスクを抱えてでも、メディアそのもの主体（情報の送り手）になるという道を選んだ。それが許さんにとっての、「神」というイメージの実体だったわけです。

「本当のことを言う」「自分の信ずるところをありのまま述べる」という行為は、どんな目的も超えて、許平和という個性の、内面からの欲求そのものであったことは、疑いえないと思います。

また、自分（と家族や親しい友人）が育んできた世界を、守り発展させていくことは、地位や役割というよりも、生まれながらに彼が背負った宿命のようなものだと考えられます。メディアでの発言というものは、決して世間に対する攻撃的な行為ではない。守るべきものを守り、大小様々な形で世界中に起きてくる不幸な対立や矛盾を、リスナーとの対話のなかで癒したり解消したりしていく——そういう受け身の、しかも最も主体的な、行為だと解釈できます。最近デパートでも病院でも、「お客様のための店」「患者様のための施設」という言い方が徹底されてきましたが、許平和の運営するメディアは、視聴者のためのメディアであるということになると思います。媚びることはないけれど、視聴者の立場と価値観を最優先に考えて、番組づくりも行っています。

今、「心の医師」・「もう一人の家族」として社会からの重要度が増している「カウンセラー」「セラピスト」、あるいはいろいろな角度から個人や企業の危機管理をおこなってくれる「リスクマネージャー」などなどの役割を兼ね備えた「話し相手」として、存在しています。

豊か過ぎるほどの知識と体験を活用して、何の選別もなくリスナーの前に立つ。

どんな立場、どんな事柄に対しても、率直に単刀直入に本当のことを言う。

いくら全世界を相手にできるメディアだとしても、一気に多くの視聴者を獲得するのは大変ですし、広告スポンサーや公的バックアップに頼らない経営方針で、局として健全な運営を続けていくことは、楽であるはずがなかったと思います。

しかし、インターネットの急速な普及と、その活用の仕方の目覚ましい進歩は、何より大きなパワーとなって「ネット」という世界を構築してしまいました。悪魔のようにみえようと、天使のようにみえようと、ここに動かしがたい現実があります。虚構のように感じられても、その世界のなかで新しい人間の生き方と死に方が始まっています。

この世界システムと、人類の古典時代につながる「客家」のつながりに、私は素直に強い興味をもちました。

家族の生き方

——愛情は相手のために表現するもの

許平和は教育について、どんな考え方をもっているのか。

教育論なんて、誰の話を聞いてもあまり面白いと思ったことはないのですが、許さんは具体的な自分の子ども瑠伊君とどう接し、どんな親子関係をいまもっているか、を語ってくれた。それは「論より証拠」の、とても面白く具体的に納得できる教育論。話してくれたその口調のまま、再現しますから、生野菜のように味わってください。息子の瑠伊君はアメリカで学び、そのまま現地の企業の一線で働いています。

アニメーションなどの映像の制作がそこでの主な仕事です。

《息子から、出向している会社でリストラがあったと連絡があったんです。ああそう、じゃあ、久しぶりに帰って来れるねって応えたら、いやそれがね、僕は残っちゃってと言うから、へえ、そりゃ残念って言ってしまった(笑)。

それでね、少し詳しく話をしてくれたのですが、彼の隣の席にいるセクションのボスが、年末に首を切られたそうなんです。「スタートレック」のドラマ制作のヘッドをやっていた人なんです。

業界では有名な人で、瑠伊は家族も知っているのですが、「大変だなと思う反面、この人のセンスは古いし、世の中についていけないとわかってた、だからこのままではマズイと思っていたら、やっぱりリストラの対象になったんだよ」と僕に言いました。

ああ、自分で分析できているんだ、ちゃんと客観的になって見ているのだと、僕もそのとき感じることができました。

「僕には信じられないよ、あなたのような人を——」と言いながら、同時に、その人が能力主義社会のなかで自然淘汰されていく必然を見ている。それが彼の言葉からわかりました。「それはひどい話だよ、会社の損失だよ」と、その人に言葉をかけながら、心の中では別の判断を働かせていて、「僕は必要とされる人間になろうとしているから、同じ轍は踏まない」と冷静に考えている。

思わず僕は、「瑠伊、大人になったね、ちゃんと分析できるようになったね」と言っていました。

僕は、親と子が、お互いにそれぞれの立場で、「親子」を演じるということをし、ひとつのルールのように実践しながら、自分を客観的に見ることができる力を、

持てるように導いていったつもりです。自分もそう、育ってきたと思っています。それは、技術とマネージメントの両方を、身につけて発揮する力をもつことにつながることだと考えています。

そのとき、「リストラといえば、ソニーがアメリカの工場を閉めることがニュースになっていたけれど、お父さまはどう思ってる？」と聞かれました。

僕は、「ソニーにとってテレビをつくるのが本当に必要だろうか。アメリカの労働者を食べさせることが目的の工場なら、やめることは必ずしもマイナスのことではないよね。本来的に何に力を入れるべきか、判断できれば、テレビなどの家電製品は棄てることもありだろう。その判断が大事なんだと思う」と言いました。

企業とは何か。巨大なプロダクツを行って、国の経済を動かすことがスゴイのか。それが本当に企業の利益になるのか。僕はそうではない気がするとも言ったんです。

誰も、そういう本質のことをいわないし、言わないことで安心しているわけです。アメリカのために、国のために、企業のあり方を考え、そのために生き残る

策を考えるとというのが、建前的な企業の判断であったり、不況への対応であったりしています。

でもそういうことは、実際に企業のマネージメントに当たる人間が、体験を通して確信し、実行していくしかないことでしょう。

僕は続けて瑠伊に言いました。

「いまアメリカと世界の経済は、大きな動乱期のなかにあるね。君はまだ社会人一年生なのに、すごくいい時期にアメリカにいるわけだよ。知っているように、アメリカのビジネス社会は、義理人情なんか関係ない、非常にシビアな価値観が支配している。さっきのリストラの話も、アメリカの資本主義社会の、典型的なあり方だよ。企業は、必要な人しか残さないし、逆に必要とみなした人には、ものすごいギャラを払う。そういう社会が不況に直面して、どんなことが起きるか、企業がどんなことを実行するのか、君もつぶさに見ているわけだね。何も問題が起これない状況の下では、なんの勉強にもならないからね」

そう言うてから、いまとりあえず、何に気をつけるべきかという話になって、「経済が悪くなると、街中に悪い人間も増えて、危険なことも増える。特に夜の

一人歩きは注意しなさい」

と言いました。

瑠伊も「そういう視点でサジェスチョンしてくれる親っていないよね」って、笑っていました。まあ、苦勞も含めて、彼はアメリカでの仕事と生活が楽しいみたいです。》

.....

どうですか？

交わす言葉はあくまで軽く柔らかかですが、かえって情愛の確かさを感じさせます。

父は自分の理解や期待が、息子へ重さとして伝わらないよう、配慮しながら自分の意見を伝えていきます。

息子だって、自分の判断や行為への肯定を自然に引き出すことで、さりげなく父への信頼や尊敬を表現しています。たいしたもんだと私は思いました。

そして対話の中身は、ギリシャ神話やイソップ物語のような寓意や象徴性を、この時代の「いま」を生きる人に、示してくれている。

経済不況は、誰(何)の責任によるどんな現象で、個人はどう立ち向かっていけばいいのか。日本の企業のような終身雇用制の終わりや、年功序列制の終わりは、格差の拡大や生活の窮乏化をもたらす悪の指標なのか、個々の自由と主体性を引き出し、実力と努力が報えられる社会のイメージにつながるのか。

いま体験している事実は、体験としてどんな普遍性をもっているのか。古い価値観の世界から、新しい価値観の世界へ、誰とどんなふうに移って行くのか。自分の幸福と他人の不幸は、相関関係があるのかなのか。

長い時間を一族の歴史として所有している彼のまなざしは、時に未来から投げかけられるような自在さをもっています。

そして、勤め先の会社のリストラをめぐる父と子の対話は、社会・職業・企業、そして家族に対する深い寓意とシンボルに満ちています。

ギリシャ神話だって、今は古典の世界ですが、できた当時はビビッドな誰にも関心ある問題を描き、伝えていったのだと思います。

ふたりの言葉のやり取りから感ずるのは、やはり「親子を演じる」という許さんの言葉でした。それは不自然さを意味しません。自分が自分を客観的に見ることで、お互いが情感をぶつけ合うよりも相手のために何ができるか考えることができる。

きれいな言葉の交換も、自然な礼儀作法も、強いられたものだと思えばうっとおしいでしょうが、自分が必要な力を身につけるためのスキルだと考えれば、もつとちゃんとすべきだったかな、といまさらながらに思います。

補足して、許平和さんの家族観や、親子の関係についての考えの一端を聞くこともできました。以下に披露してみます。

家族というものの基盤の、目に見える形態はぜんぜん違うはずなのですが、聞いていて納得でき、戦後の日本を生きてきた私にとっても、国民性や生活文化の違いから来る違和感はありませんでした。

やっぱりこれは、不思議なことですが、私たちが見聞きしてきた「常識」や「見識」が、正確でなかったことをあらためて感じさせられました。

なぜ、許さんの「常識」や「見識」が、日本人の今生きている人たちの疑問や

不安や苛立ちにフィットして、さらに言葉を求められることになるのか、こちら側のニーズの根拠まで、わかってくれているのが、一番ありがたい点だと思いません。

西欧の知識人や外交家の、「日本通」の人たちとは、一味も二味も違うのが、彼が少年期から育った日本社会への理解であると思えます。その公平な理解に立つて、批判的な視点も生まれてきます。最後の章で引用している、彼の日本人観はかなりビターなものがあります。

しかし生産的な視点だから、言われてもいやな気がしません。

身近な問題から世界を見る

では、こちらの質問に答えてもらうスタイルで、日本社会が直面している諸問題について、許平和の意見を語ってもらいましょう。

許さんの考え方、ロジック、発想、好き嫌いが、どなたにもよく見通せるかたちで、編集構成を行いたいと思います。

新聞・雑誌・テレビ各メディアの、討論番組、ニュース（論説）、オピニオン記事の、どれも大変に不満な私としては、許さんにあれもこれも聞きたいのですが、散漫になるでしょうから、テーマを絞ってお聞きしました。

質問の中心テーマは、いま家族のなかで何が起きているのか。これから私たちの家族はどう生きればいいのか。家族にとって何がトクで、何が損なのか。

——最近、日本の一般的な家庭で、親が子を殺したり、子どもが親を殺したりするような、ある意味「もう終わりじゃない？」と思わされるような事件が起きています。だからといって、それらは特別な家族の事情や、とくに異常な性格によって、引き起こされた事件ではない気がします。親子の間に、夫婦の間に、家族と社会のあいだに、何か根本的な変化や危機があつて、それが、虐待や殺人や他

の暴力という行為の形に反映してはいるのではないでしょうか。いまどき、事件や加害者に理解や同情を示すと、マスコミ上で袋だたきにされる風潮もあります。こんな市民社会の排他的意識も、そういう危機の反映の一つであり、個々の悲惨な事件の要因をつくっているように見えます。

というわけで、起きていろいろな現象を踏まえて、本来の私たちの主体の置き所である家族のあり方を中心に、日本全体の情況や、経済の着眼点なども、教えて欲しいんですが。

許 わあ、一度に来ましたね。でも一番大事なことですよね。

息子の瑠伊と話した、これからどうなるんだろうねということ、重なるかも知れないけれど、こういう家族や個人生き方の問題と、経済社会で起きている不況やリストラや失業の問題は、一見わかりにくいですが、はっきりつながっているとします。

要は、自分たちの社会の構造と、価値観や倫理観のあり方が、既に大きく変わって、それに応じた生き方や、人との接し方が必要なのに、日本人や、日本人の親や大人が、それに気づいていないという面があるのではないのでしょうか。

外側の世界を見ると、近代化が進み日本の社会と経済構造も、産業の基盤が農業から工業に移って、それが高度になっていって、基礎教育の領域も、ハードの技術以上にソフトが重視されるようになってきた。

つまりデザインやその他のセンスを高度化することが優先になったわけですね。戦後から現在へ、さらに経済が成長するとともに、ハードからソフトへ、第二次産業から第三次産業へ、イメージや選択消費が重視されるように、社会の構造自体が変わっていきました。

しかしその変化に限界が来て、現象として品物が売れなくなったわけですよ。

日本全体として、物が豊富にありすぎて飽和状態になりました。例えば携帯電話も日本中に普及して、もう売れなくなったと言われています。

でも本当にそうだろうか、って考えますよね。最近 iPhone が売り出され、爆発的に売れました。従来の日本の携帯電話に比べれば性能はひどく落ちる。テレビは見れないし、メール通信もスムーズにいかないし、ストラップの穴もついていない！（笑）し、ものすごく不便なのに、売り出しの数日前からショップに列ができたんですね。

本当に物が売れない、真に「不況」といわれるべき状態なら、こんな現象は起かない。現に今韓国ウォンが下がって、ルイ・ヴィトンでも何でも安く変えますから、ものすごい数の日本人が買い物に行っています。

ブランド品も売れなくなつたといわれていますが、ある価格のボーダーラインを超えると、客が並び始める。これは、不況ではありませんね。

——何が、どこが、従来の不況と違うのでしょうか

許 絶対的な、お金のあるなしの問題ではないということです。消費が行き詰まつた原因として、まず挙げなければいけない原因は、一般大衆と呼ばれる人たちに、「ものを見る目」ができてしまったということです。「もの」に対する価値観の質が上がってきた。そのとき起こる現象を、車を例にとってお話します。

昔はね、この車は一千万円するということで、売れたのです。

絵画でいえばピカソは、三億円するとして、その三億円もする絵がほしくて買ったのです。それを所有している自分、というものに最大の価値を置いていたわけです。

同じように、ルイ・ヴィトンのバッグは三十万円する、ダイエーで買ったたら三

千円で同じような物が買えるけれど、品物の性能ではなく、三十万円という価格を買った。こういう現象が約二十年間続いたのです。

高いものが（高いから）売れるという時代が続き、バブル経済が頂点を迎えて、みんながあらゆるものを買いました。三十万円もするルイ・ヴィトンのバッグを提げて電車に乗る、という変な現象が日本で起きていました。

しかし、やがて物の値打ちがみんなわかり始めます。ブランド品も、実際使ってみると壊れやすかったり、一般商品と同じようにボロボロになる。ローンを山ほどかけてベンツを買ったけれど、普通のカローラと性能は変わらない——だんだんメッキがはげてきたんですね。

一般の人々の価値観が成長して、物の値打ちがわかり、センスのいいものに金を使うようになりました。iPhoneという製品のデザインとセンスにお金を払う。極端に高ければ買わないですが、少し高い程度なら買う。

デパートのバーゲンも、価格のボーダーラインをめぐって、売れる売れないが決まります。ブランド意識にも同様の変化が見られます。

この変化は、日本の社会構造や、日本人の価値意識の歴史のなかで、昔の革命

や政変と同じくらい大きな変化だということが出来ます。日本の消費者が自分で学習して、この画期的な変化をもたらしたのです。

これはものをつくるメーカーの側からすれば、大変なことが起きたわけですから、お客を騙せなくなったということですから。

車で言えば大衆車の一〇〇万円で売る車は、実は利益がすごく低いのです。価格の高い高級車の方が、材料にも凝るから利益率が低いように思われるでしょうが、本当は逆でカローラなんかも一〇〇万円に対してごくわずかの利益で売っています。高級車は半分くらいの利益が出ると考えていいでしょう。

自身は、一緒なんです。サイズやデザインや仕様が多少変わってもね。

一般大衆は、この価格のからくりを騙されて、「今度はもうワンランク上のクラスを買おう」という発想だったのでしょう。でも目が肥えて物の値打ちを知ったから、そういう一種のごまかしはきかなくなりました。

一般商品だけでなく、アートに対しても同様です。物の値打ちについての知識や感覚を、自然に身に付けてしまったから、価値あるようにふるまってきた者たちは、みんな立ちゆかなくなる。

新聞雑誌が売れなくなったのも同じです。品物や情報を受け取る側に、価値を見抜く力がメキメキついてしまった。いい物は売れるのだから、本当の不況ではない。提供する側はそれにまだ十分気づいていないのですよ。

政治家の意識にも、国民との間にズレがありますね。この大きな変化の意味を把握して、政策に取り込むことをしていません。公共事業や製造業ではなく、消費に直接関わる産業に金をつぎ込み、消費を喚起する以外にないので、ズレていますね。

小売りの世界で、スーパーマーケットも含めて、崩壊現象が生まれています。この変化に気づいて対応するメーカーは必ず出てくると思います。同時に、新しい物の売り方も、生まれてくるでしょう。

——政治家だって、国民に対して通用しない見識やセンスで、滑稽な存在になっていることに気づかない人が大半です。

今までだったら、一種の愚民政策で、英語が苦手、という国民性みたいなものを、わざとのように維持させてきた感じでしたが、もう普通に海外に出て、国際性というセンスも身につけてしまった。政治家たちの方はそれに気づいていない

ののでしょうか。

許 気づいていないようですね（笑）。まだ立身出世みたいな人が多いから。

とにかく、価格と価値に対する認識が変わったということは、経済力がどうなったということ以上に大きなことで、そこから、消費者という主体が立ち上がってきて、社会自体の構造が変わってきました。

それにともなつて、価値観や倫理観も、新しく変わらなければならないと思います。そこがうまく転換できないから、家族や親子の問題が、不幸な事件につながっている面もあると思います。

私たち一族は、時代を超えた価値観で維持されている面もあり、ある意味では普遍的な価値観を身につけているように考えていますが、古い者がみんなダメになるとか、若い世代に迎合するとかいう意味ではなく、新しい現在にあった倫理観や道徳観が、誰からも求められているように感じます。

——そういう大きな価値の変動みたいな情況と、物の売れる売れないの問題も、リンクしているのですね。

許 そうそう。これはこの値段ですがちょうどいいでしょう？ こちらは少し高

いですが、中身が本当によくなくなっていきます……こういう対応のなかに、現在の成長した消費者に対する正しい対応のノウハウがある。はつきり言って、利幅の小さい高級車（一千万クラス）を造ったら絶対売れますよ。だってまだ、フェラーリが売れているんでしょ。荷物は積めない、ガソリンはしこたま食う、バカ高い、雨は漏る……とんでもない車なのに（笑）。

——デパートのような小売り形態で、地下の食料品売場だけ売上が上がって、安さと鮮度で指示されてきた食品スーパーが、客の嗜好に合わなくて苦戦している。売る側が、価値を決められない時代ですね。

許　　どんどん国民が賢くなるから、国がコントロール出来なくなってきた。メーカーも量販店もコントロールできない。

——いま、病院経営や、地方の医療体制の崩壊が問題になっています。一方で、医療技術の進歩と、それを受けられるかどうかの、経済格差の問題がでてきていと思います。格差は発生しても、可能性が広がり、選択肢が確定されることはいいことだと思うのですが。

許　　僕は、医者に個人営業をさせるからややこしくて、政治家と一緒に全員国家

公務員にするべきだと考えています。

そのかわり文句の出ないような年収を与える。その上で、「専門家」として、十分な給料を払う。その代わり、試験をやつて、何科の何がその人に適性か国が決める。試験で適性を決める。

生活の心配は要らないから、国家公務員として国民のために働いてもらうという事です。やはり医者は人格者でなければならぬし、元々は、日本の町医者というのは、人格者で尊敬され、自然に「先生」と呼ばれていました。

それがいつからか、医者はあやしい、裏で悪いこととして儲けてると思われ出した。商業主義の中で、悪い方へ傾斜していききました。でも僕の言う制度では、人に冷たく当たったり、コンセンサスをとらなかつたり、医者の本分に反する医者、即刻クビ。教師と同じように、「専門家」としてニーズに対応させる。特権や聖職みたいな立場ではなく、お金を十分払い、人の生き死に関わる専門家として、仕事をしてもらう。

——よく理解できませんが、そういうことを具体的に実現していける可能性はあるんでしょうか。政治の現状や、政党の現状をみても、その立場が右でも左でもない

いけれど、具体的に何とかしようという発想も、具体化する能力も、感じないの
ですが。

許 公務員化するようなコントロールの仕方は、行きすぎると共産主義や社会主義と同じになって、そういうのはダメだって社会の方からバツテンをつけられています。自民党は、安定した経済成長を実現し、首相がいなくても世の中がそれなりに維持されるシステムをつくった、ということはずいことだと思います。でもいま、大きな社会構造の変化や、国民の生活意識の変化に対応できない。

あのね、もし僕が許されるなら、世界各国で活躍した政治家のOBを、日本の政治のために雇うべきだと思います。

——それって、サッカーと同じ発想！ 考えたら中国の（客家の祖先といわれる）孔子も、そういうふうに、雇われながら政治の道を説いた。つまり、専門家に任
そうということですね。

許 ええ、野球も相撲もそうですね。政治も同じようにスカウトして、何年かやって成果が出なかったらやめてもらう。日本と日本人に対する理解とか、条件付けは必要でしょうか。

それと日本の政治家で重要なことは、表現があまりにも貧しいことです。よく副社長の一村とも話をするのですが、政治家は政治家の学校をつくる必要があると思います。東大を出たからいいというのではなく、専門家としてのエリート教育をしないとだめだと思う。欧米ではロースクールが完備していますから、世界中から講師を集めることができます。

政治家としての基礎能力を育み、そのうえでふるい分けて選挙に臨む。政党間の貧しい対立もなくなるでしょう。また、利益誘導型の古い政治家タイプもなくなるでしょう。

——そういう社会構造の変化や、経済のあり方の変化と、ずれたままの対応をしていると、家族という世界での悲劇は、さらに増えながらくり返される……。

許　　そうですね。子供については、親がいまいに自分の価値観の混乱をごまかしながら生きてきて、何もの確な道を示せなくなつて、とりあえずいい学校へ行って、いい生き方をして欲しいと願ってきた。でもそこには誤解があつて、子どもも勘違いをしてしまう。親が、あなたには無限の可能性と、やれば出来る才能があるから、努力してその希望を実現しなさいと言う。だから子どもも、自分に

は可能性と才能があると思ひ、無理な願望を抱いたり、自分を受け入れない社会に無力感を抱いたりする。

でも、そんな学問や芸術も含めた専門分野で活躍できる可能性や才能を持つ人間なんか、ごくわずかしかない。それは、差別的な目で見ていうのではなく、リアルな分析としていうのです。知識や技術やアートを提供する専門家と、それを受け取って生かす一般人との違いは、差別や格差ではなく、区別としてあるのですから、自分にあつた生き方に価値の違いはないのです。

そういう事実を親や大人はよく認識して、勝手な夢を押し付けたり、幻想を与えたりするべきではないと思ひます。

お年寄りに対しても、もつと現実的な対応が必要ではないでしょうか。華僑の一族のあいだでは、今でも自分の親を施設に入れたりしたら、何を言われるかわからない。どんなに成功した人でも、それだけで人間としての評価は得られないでしょう。

神戸などに住む華僑の家族では、多くの老人がホテルの年間予約をして、そこでゆったりした生活をしています。そこでは自由に安全に、不自由なく生活が出

来ますし、費用も驚くほど安くて済みます。家族や孫や知人も、ロビーや部屋をいつでも訪れて、一緒に時間をすごすことが出来る。

私はこれは贅沢の問題ではなく、生活や生き方についての価値判断の問題だと思っ
思うんですよ。

住空間の狭さや、生活リズムの違いや、同居の問題を絶対的にとらえて、家族としての自然なつながりの美質を、手放してきたのが、今までの日本人の家族のあり方だったと思います。お金の使い方も含めて、これから新しく考えていってほしいですね。

副社長インタビュ―

——どんなステージも面白ければ怖くない

インターネットテレビKYOは、許平和社長自身が、たった一人のスタッフと制作現場を支えています。そのただ一人のスタッフが副社長の一村かおりさんです。いまや同局の誇るキャスターとしても活躍中です。

阿波徳島の旧家に生まれ、のびのび育ち、大阪の大学で経済・社会や経営について学びました。専攻は農業経済論！卒業後は郷里に戻り、四国電力と住友大阪セメントの合併企業（住宅設備機器メーカー）に就職。誕生したばかりの会社で、いきなり「会社づくり」の実務に携わり、新工場の人事管理システムをつくり上げてしまった……。

すると、さらなるステップアップを希望し、大阪に戻って労務管理士事務所へ。そこにワラジを脱いで専門学校へ通い、社会保険労務士の資格取得を目指しました。

「学校へ通いながら、空いている時間に、中小企業の社長さんたちの労務相談にのる、ということもしていました。そういう仕事の面白さ、重要さを、自分なりに感じ始めてもいました」

事務所の先生不在のときは、代わりに案件の処理を任されるようになり、入所

数カ月で部下数人を持つ立場になってしまった。そして、行政書士と社会保険労務士の資格の取得を旨ざしますが、コンサルティングの仕事は特に資格がなくてもやれるということを認識し、はや二十七歳の時に独立。企業経営をサポートする仕事で「自分らしい」道を歩み始めました。

ここまでは、「なつてしまった」という言い方の通り、幸運に幸運が重なり、持ち前の才覚と度胸とルックスを武器にスイスイ進んできたようにみえます。でも、やはり仕事に対するしつかりした理念、生き方の流儀、自分自身への信頼、などが彼女をそこへ導いたのだと思われまます。

しかしここから、また新たな波乱（？）が始まります。

「いろいろな人との出会いがあり、刺激を受けたり憤慨したりしていましたが、ちょうどその頃に、社長と出会ったのです。まあ、動きの激しかった私の二十歳代ですが、特に大きな出来事でした。ああいうのを、人生の岐路っていうんだなと、いまは思います」

当時許さんは、FMラジオ局の二時間番組で、キャスターを務めていました。

一村さんはその番組にゲスト出演して、それから許平和との長い付き合いが始ま

ったのです。番組ゲストということでも声をかけられ、言ってみたらいきなり番組キャスター、ということの運びだったそうです。

せいぜいマネージメントに関する依頼か、会社立ち上げに関する相談、という程度に考えて出かけていたら、自分がマイクの前でしゃべっていた……。

度胸というか、信頼というか、賭けというか、(いきなり生番組に)出す方も出す方なら、出る方も出る方だ、というのが私のような凡人の率直な感想です。でも、これでお二人それぞれの仕事の道が大きく変わり、開けていったことは確かでしょう。

順調に推移していたコンサルティングの仕事から、まったく違うメディア関連の仕事に移った一村さんは、いま許平和の営む「ネットチャンネルKYO」の副社長を務め、プロデューサーとタレントの役もこなして、許さん自身と同様一人何役もの仕事を担っています。ご本人は、「全部私のなかの一部として、楽しく充実してやらせてもらっています」と涼しい顔で言う。

KYOを訪れると、オフィス(リビングルーム)の壁面に、イメージキャラクターであるKAORIさんの、セクシーなポスターが掲げられ、そこへ本人が現

われたときは、おじさんの胸も久々にときめきました。

最初に一村さんを見たときから、すでに許さんのなかには、「この人」の人物や才能に対する確信があり、その可能性を手に入れ自分のビジネスに生かしたいと思ったのでしょうか。そこからは強引に、いや一生懸命説得して、自身のインターネットテレビ運営のパートナーに迎え入れ、製作についても多くの部分を任せています。

乱暴なまでの信頼感の厚さを表現されながら、「局」の人となった一村さん。いつの間やら、コンピュータ四台を中心にした機材を使いこなし、二十四時間放送するネットチャンネルKYOの副社長とプロデューサーとマネージャーとキャスターとお手伝いさん（お茶も入れてくれた！）に「なつてしまった」。

どこかの新聞に、「副社長兼セクシーキャスターという肩書がついている」という記事が載っていました。コンサルタント時代から培った、一対一で向かい合う力の大きさが、まなざし・表情や、口調や言葉の選び方に、自然に出ているのだと思いました。

彼女が数多くの番組の中のメインとして担当しているのが、「KAORI・

学!」。毎週火曜日の夜十一時からの放映で、一村さんがキャスターをつとめているのです。その「セクシーな」語り口とは裏腹に、政治・経済の時事問題から、生活日常の話題まで、硬派の視点でニュース解説風にコメント。その辛口トークがやみつきになったリスナーも多く、深夜番組として強い人気を獲得しています。

許さんとともに、時にはその代理で、外国の要人やビジネス相手と、オフィシャルな場面で会うこともしばしばあります。そんなとき、物怖じせず、気品があり、知識教養に優れ、愛嬌があり、マナーの身についた一村さんは、正にうってつけの役柄を、いつも見事にこなしてきました。こうやってホメる私も、信用されようと必死なので、単なるべんちゃらだと思わないで下さい。

「いきなり、その場面に放り込むのが社長のやり方。信頼されているのは嬉しいですし、やりがいもあります。ずいぶん荒っぽい教育の仕方ですよ(笑)。こちらは必死で、失敗しないように、話を壊さないように、気に入られて信用されるように、心もがき苦しんでいるときもあります」

とはいえ、その人間力は、許平和の洞察通り、期待通りの成果をあげ、局の発展にも寄与してきました。国や企業の要人だけでなく、時にはその土地土地に根

ざした顔役的な人物と、さしで向き合うシーンもある。そんなときも、あの緋牡丹お龍や峰不二子のように、堂々と優しく、ふるまってきた（そうです）。

K A O R Iさんもまた、局や番組や、事業や作品や家族と同じように、許平和の優れた表現力によって生まれ、かけがえのない身内としての存在になりながら、同時に自身の表現力で個性を発揮し、自立しているのでしょう。

これは、許さんにとって、理想のパートナー像であるのだと思われます。

最後に、一村さんから見た許平和さんのトータルな印象を聞いてみました。

「最初に出会った頃は、アーチストとしての仕事を中心でしたから、鋭く尖った印象で怖い感じがありました。いまもそういう面はありますが、愛情と責任をもつて、仕事の相棒に選んでくれていますが、よくわかります。唐突に何か任せられたり、説明なく誰かに合わされたりすることは、大きなストレスのもとでもありますが、仕事をするものにとって、めったにないほどの幸運だと感じてきました。話していて面白く、いつまでも飽きないということは、人間としての魅力の証だと思います」

リスクと責任を同時に負う。これは、許平和の事業と、教育の、原則のように

思えます。

サンクチュアリ・インターナショナル

貴族とは何か

許平和は、中国の歴史社会のなかに根ざした貴族の家に生まれ、現在もその一族のリーダーとしての役割を担っている。かつてどこぞの貴族であった一族の末裔とか、財閥のだれそれの血をひいているとかではなく、現にいまリアルタイムに貴なる族の長として生きており、世界中にそれを認知しあう貴族が存在していません。

これはすごいことかもしれない、と私は感じました。貴族が貴族として存在している、許家が許家として存在しているということは、そういうシステムが生きていく（健在である）ということだといえます。金や権力で無理やり存続しているものなら、この激しい時代の変革や、価値変動のなかで、自然にゆきづまり、壊れたり変化したりしていることでしょう。

日本でいえば江戸時代のような統治システムは、今から見ればひどい前近代性ではあっても、それなりにあらゆる階層や地域や文化が一定のバランスのなかに

共存していましたが、やはり時代の動きのなかで外の風にさらされ崩壊しました。現代でも、家族という従来のあり方が解体したり、企業の雇用関係や給与体系が変化したりしています。善悪の問題である以上に、そういう個々のシステムが、耐用年数を超えて、成り立たなくなったのだと思われれます。

西欧でもアジアでも、壊れて廃れた貴族制はありますが、今ある存在は、生きていけるシステムの優位性をもって、この混乱期の世界に存在しているに違いがない。

階級だとか、身分だとか言いはじめると、格差だとか、不平等だとかの話になってしまふ。しかし、いま古い理念やイデオロギーの曇りガラスをとり除けば、貴族の家に生まれるのは、できること・しないですむことの豊かさ、引き受けること・避けられないことの、メリットとデメリットを生まれつき負わされるに等しいといえます。

許家筆頭として生まれた私は、幼い頃から一族の長老たちから特別なカリキユラムを受けてきました。

もちろん通常の教育も受けるのですが、それ以上徹底的にタイパン（太人）思想を教育されました。とはいえ王朝時代ではありませんから、一人前に疑問や反発の繰り返しではありませんでした。

しかし突然、ある年齢になると一族の誰も私に助言や教育するものがなくなりすべて肯定になったのです。広い宇宙にただひとり放り出されたような気分でした。

その時に教育されてきた全てが理解できたのです。筆頭（リーダー）であることの資質「人の意見を聞かず、思想に左右されず、宗教に侵食されず、時代に流されず、孤独に潰れない、そして時代を読み、時を読み、一人で考え一人で決定する」——これについて、本人は自覚がないのですが、幼い頃からの刷り込み教育は大したもので、側近によると私は人間とは思えない思考回路をしているらしいのです。

（東海青年会議所講演記録より）

許平和の考え方で考えれば、貴族は、世界という現実のシステム（構造）のな

かの、一つの専門性であり、役割であるということになるでしょう。

ただあまり許さんのことを、やわらかく、物わかりよく、きれいごとみたいを描くのは、面白くないし事実とかけ離れます。

私たちは、「戦後民主主義」という進歩的理念の下に戦後日本の教育を受けてきました。出自の違いや民族性の違いより、この教育システムのあり方が、私たちと許平和の違いの根源みたいな気がします。別に卑下しているのではないのです。

私は、国でも、地方でも、企業でも、文学でも、芸能でも、歌手でも、ファッションでも、民族文化でも、制度でも、技術でも、機械でも、自然でも、風俗でも、食物でも、芸術でも、いま現在残つてあるものは、古い新しいの差としてではなく、全部横並びの等しい価値観や選択肢として、私たちの世界に存在しているのだと思います。

どれをどう選ぶかがまったく個人の自由に委ねられ、その結果得をすることも損をすることも、これまた自由で平等な機会の問題になりつつあるのだと感じています。

だから貴族という立場は古くない。

貴族は、精神として、文化的活動として、国境や職域を超えた人脈として、生きていく。その生きている現実の証のひとつが、「サンクチュアリ・インターナショナル」という許平和の運営する国際的な親睦組織です。

ここであらためて、許平和さんの生活全体と、国際的な活動を支えてきた奥様の真弓さんを紹介します。

ただ、身内として、夫婦の相手として、の立場だけで許さんの本のなかに登場願ったのでは、お二人ともきつと不満でしょう。世界と社会に向けた許さんの活動の中で、真弓さんははつきりと重要な役割を果たしています。

許さんは、メディアを遊泳しながら自身の世界を広げ、同時に各国の都市や企業や文化の話題を探り、キーパーソンへのインタビューや家庭訪問を通じて、重要なパーソナル情報や、最新の政治経済の情報を、世界へ送り続けています。その大きなサポート役を果たしているのが真弓さんです。息子の瑠伊君るいとともに、まさにファミリーとしての明るさや自由さをそのまま表現しながら、世界中を回

つてきました。

許真弓さんは、ご自身も音楽人としてマスコミ人として、独自のキャリアをもっています。いまは、優れた音楽教育で知られる大阪の相愛大学音楽学部で、作曲専攻の講義を受け持っています。教えている内容は、音楽と映像の融合した新しい表現。ほら、許さんがハリウッドで手がけた仕事にもつながっていますね。

学問としても、実践課程としても、新しい分野の創造に近い面白そうな内容です。

大学のパンフレットには、次のような真弓さん自身の言葉が記されていました。

《プロデビュをめざして、一昔前は演奏のデモテープをレコード会社に送っていました。これが、これからの時代は「音」だけでなく「映像」も含めたプロモーションビデオのアピールが効果的。しかも楽曲はもちろん、その映像の企画、演出から編集までを一人で手掛けたとなるとアピール度は倍増！ そんなオールマイティな二十一世紀型のアーティストを育てたいと思います。》

因みに真弓さんは相愛学園創立百二十周年記念曲「よろこびの歌」を作詞・作曲されました。

関係の豊かさ伝えるメッセージ

「サンクチュアリ・インターナショナル」は文字通り世界中にネットワークをもち、ジャンルを問わずその国、その都市のキー・パーソンが参加しています。いわゆる有名人ばかりではなく、各界を第一線で担う人物が、許平和を中心に国境を超えた交流を行っています。「サンクチュアリ日本」は、一九九六年にスタートしています。

日本でも高度経済成長期が終わるところから、各地で異業種交流の組織が自然発生的に生まれ、活動してはいますが、総帥として許さんが率いる「サンクチュアリ」はひとケタ違うスケール。そこで交わされるメッセージの一例をご紹介します。

許氏はわが公国・レーニエ大公と長く親交を続けられており、私も大公からご紹介を受けたのを昨日のように覚えております。

素晴らしい奥様とご子息とも楽しくお付き合いさせていただいております。

また、大公の誕生日パーティーに出席していただいております。その度に大きく国際的に成長なされている許氏にお会いできるのを楽しみにしております。個々モナコは国土が非常に小さいのですが素晴らしいロイヤルゴルフ場があります。一度だけ許氏をお誘いし、コースを回ったのですが、あまりゴルフがお好きではないらしく、その後のお誘いには一度もよいご返事をいただけません。是非今度はこちらと一緒にしたいと思います。お待ちしております。

モナコ公国市長 ジャン ルイ メデイスン

日本のサンクチュアリアンの皆様、サンクチュアリ・ジャパン開設おめでとうございます。許氏との親交は幸いにもすでに十年を越えました。もちろんサンフランシスコ市長在任中は、より深くご協力やアドバイスをいただき、数々の問題解決に誠実にご協力いただきました。その度に、許氏の人格・理念・世界的な人的ネットワークには感激と興奮を覚えていました。

私も古くからのサンクチュアリアンとして品格と信念を持ち政治活動が続けてきました。皆様も私達と共通の価値観を持つサンクチュアリアンとしてご活

躍をされることを期待いたします。

元・サンフランシスコ市長 アート アグノス

昨年スタートしましたサンクチュアリ・ジャパンは、短期間で多数のメンバーを迎えることになりました。このことは既に数十年の歴史を持つサンクチュアリ・インターナショナルの活動に比べても、いかに日本の皆様に私が大切にされているかがわかり感激し感謝しております。

近年、世界的規模で激動の時期が近づきつつあるのを感性で感じるのは私だけでしょうか。このとき信じるに足るものは何か、国でしょうか宗教でしょうか。

たとえば、記憶に新しい神戸の震災、その瞬間頼りになるべき国や行政の活動は笑い話にもならないほど情けないものでした。

体温が下がりつつある子供を抱いて途方に暮れる夫婦を励ましながら必死に病院を探す若者達、隣のおばあさんをガレキから助け出そうと中高生達、親族や友人を心配し水や食料を自転車やオートバイで走る人々、パニックにならず

冷静に行動する被災者の方々。

あれから二年が過ぎようとしている現在、私たちは学ばなければなりません。本当に信じられるもの、それは自分自身と人間関係なのです。パニックに陥らず冷静に情報を分析し速やかに決定する。

世界や国内の状況が急変しようとしている現在、私たちサンクチュアリは国や宗教・イデオロギーに左右されず責任を押しつけず行動できる真の国際人になろうではありませんか。

一九九七・一・一

サンクチュアリ・総帥 許 平和

私は、ハワイで生まれた日系二世です。

そういう意味では古い友人である許氏と同じ立場ではあるのですが、家庭環境は大きな違いがありました。

一九一九年に両親はハワイに来ました。しかし一緒に来たわけではなく、母は移民として正式にハワイ来たのですが、父は船乗りでしてハワイに着いたときこの島が気に入ったのでしよう。船には戻らなかったのです。

その後、私が生まれ両親は苦勞して私をメインランドの学校に進学させてくれました。

私は弁護士になりハワイに戻りました。そして一番最初にした仕事は、父は非法にアメリカに住んでいるので、合法的に永住権を取れるようにしました。

そして当時のハワイ知事からは非議員として立候補しなさいと誘われ、これには大変驚きました。弁護士になったばかりだし年齢も若かった、そして何より選挙までに三十三日しかなかったのです。私はいったん断ったのですが、彼はとても熱心に議員になることを勧めました。そして私は決断したのです。

結果を気にしていたらより高い夢にチャレンジできませんね。両親から教えられたポリシーでした。

当時は日系を中心としたアジアの人達がいくら頑張っても、ある程度のポジションまでしか行かないのです。むろん政治の世界はもっと困難でした。私が立候補したのもそこに理由がありました。

その後四十八歳のとき選挙で州知事になりました。大きなプレッシャーでした。私が頑張らなければ後に続く日系の人達の道を閉ざすことになるからです。

ですから。仕事以外の事にも多くの時間をさきました。

現在の日本が経済的に発展していくことはたいへん素晴らしいと私は思います。

しかしここで考えていただきたいのは、この素晴らしい日本は私たちの両親、先輩たちの努力の結果なのです。このことを忘れないでいただきたい。『人間の前に国家は無い。常に国家は人間の後に存在する』——これは、許氏の率いる一族の世界観に通じるものがあります。

そして許氏との交友関係がなくなるにつれ、深い洞察力や歴史に裏付けされた親交の巧みさに感心するばかりです。

私も許氏を通じて、多くの事を知り助言もいただきました。今後とも素晴らしい関係が続くことを願っております。

ジョージ R・アリヨシ

サンクチュアリ・メンバーの皆様こんにちは、アーノルド・パーマーです。今回、ラジオコマーシャル出演のためロサンゼルスでベストフレンドの許氏

と久しぶりに再会しました。

このコマージュは青少年の麻薬撲滅キャンペーンの一環として放送されるもので、制作にあたり音楽プロデュースを許氏に依頼いたしました。忙しく飛び回られているのに快く引き受けていただいて、素晴らしい制作現場になりました。

私はかねてより青少年の麻薬常習者更正運動に協力しており、ホームベースであるマイアミでは彼らを受け入れるスポーツセンターも運営しております。

許氏にも賛同をいただき、毎年行うわが家のホームパーティーにご出席いただく際に、講演や演奏会に出演していただいております。

許氏の卓越した才能とお話には、お会いする度に新鮮な刺激を受け、私のファミリーをはじめスタッフにも多くの信奉者があり、中でもワイフが一番のファンなのです。また、常にどのような立場の人物に対してでもフレンドリーに接するスタイルには敬服と尊敬を抱いております。

今回お会いした際に日本の麻薬汚染状況も悪くなっており、特に青少年の汚染が急ピッチで進んでいるとお話を聞きました。

アメリカでは青少年世代の爆発的汚染は去りました。しかし多くの若者が現在でも後遺症に苦しみ、また新たな誘惑にさらされています。

この現実に対して私たち大人がどのようなことができるのか、特に私はスポーツを通じて一人でもこの苦しみから脱却できることを望んでいます。

ちなみに、許氏作曲のラジオコマーションの音楽は大変美しく心洗われるメロディーでした。

その後、いやがる許氏を無理やりコースにお誘いし、楽しく一日過ごしました。

〈パーティーでの私のメッセージ〉

「私の夢は、アメリカの若者を麻薬から解放すること。あらゆるツアーで優勝経験をもつ私が、せっかく永久出場権をもつPGAツアーでの優勝だけは逃しているのですが、これを果たすこと。それにベストフレンドである許氏のゴルフ嫌いを是正することです」

アーノルド・パーマー

サワデイカ！ 親愛なるサンクチュアリ・JAPANの皆様。

タイ王国・メトログループ会長、サワン・ラオハタイです。我々は許家と同族で、私自身はタイで生まれたタイ国籍華僑です。タイでは王族・軍属・経済と三つのパワーバランスが取れており、古くから安定した国を形成しております。その中でもバンキングをはじめ多くの企業が華僑の手で運営されており、タイ経済＝華僑という図式になっています。

私も大学は日本に留学し、日本を代表する商社・伊藤忠商事に勤務しました。その後帰国し、まず農業国であるタイで重要な肥料工場を設立いたしました。これにはタイ国・伊藤忠商事・許一族がサポートし国家を代表する企業に成長いたしました。

現在では、肥料・アメリカンフラワーミル・ブリティッシュペイランドBP・鉄鋼・運輸・倉庫・石油・リゾート観光など六十社を超える企業集団になりました。

日本滞在中は、前タイパンや日本におられる一族、また多くの日本人のみな

さまに助けられ、有意義な日々を過ごさせていただき大変感謝しております。もちろんすばらしい友人もたくさんおります。

また、現一族筆頭タイパンである許平和氏は非常に才能豊かで、このタイでも多くの新聞雑誌・テレビなどで活躍され最も著名な人物として知られております。

このことはタイにいる我々同族の者にとって、誇りであり憧れでもあります。ちなみに許平和氏にはグループ企業のTVコマーシャルにも出演していただいております。

最後に、今回サンクチュアリ・JAPANのみなさまに、ご挨拶させていただいたことには大変感謝しております。

ぜひタイ王国へご訪問いただけますように。

サワン・ラオハタイ

私たちとは縁の遠い世界の、未知の人たちの間で交わされる会話をさっと読み

ながら、どこの国の、どんな環境の、どんな立場の人間であっても、正しいことは正しいし、間違ったことは間違っている。希望はどこからでもわいてくるし、その希望の信号を、見落とさないようにしなければと感じました。

政治体制や国民性や生活環境や宗教や信条の違いを超えて、新しい価値観や倫理観をつくりだそうともがいているわたしたちにとって、「情報としての許平和」は、「存在としての許平和」と同じくらい魅力的です。どうかこの本を通して、もっと広く、もっと遠くまで、許さんのことが人に知られていきますように。また私たちも、許さんのことを、もっと詳細に深く知ることができそうですように――。

あとがき

許平和さんへのインタビューは、期待通りの楽しく有意義な体験になりました。特に経済と情報文化の接点で、〈世界〉や〈日本〉をとらえて分析される語り口は、いままでどこからも得られなかった面白さと刺激に満ちていました。

話を聞かせてもらった私の充実感が、そのまま読者の方々に伝わり、また、許さんご自身の満足にもつながれば、嬉しいと思います。本を企画した出版社・濛標の松村信人さんに、今回の許平和さんとの連携が、より多くの豊かさをもたらしますよう祈って、あとがきとさせていただきます。

多木祥次

netchannel KYO

URL <http://www.nc-kyo.com>

Email nc-kyo@nc-kyo.com

Sanctuary

URL <http://www.nc-kyo.com/sanctuary/sanctuary.html>

Email sanctuary@nc-kyo.com

ニュータイプオラクル 許平和
二〇〇九年八月一〇日 発行

構成 多木祥二

発行者 松村信人

発行所 滯 標 みおつくし

大阪市中央区船越町一―六―二―四〇三

TEL&FAX 〇六―六九四四―〇八六九

振替 〇〇九七〇―三―七二五〇六

印刷製本・モリモト印刷(株)

定価はカバーに表示しています
不良本はお取り替えいたします



9784860781453

ISBN978-4-86078-145-3

C0075 ¥1300 E

定価(本体1,300円+税)



1920075013004